
COBALT-SERIES
鬱金の暁闇9
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
集英社



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 9

前田珠子

集英社


破妖の剣



COBALT-SERIES

破妖の剣（はようのつるぎ） 6

鬱金の暁闇（うこんのぎょうあん） 9

前田珠子

集英社

目次

鬱金の暁闇 9

第三十章　解れた糸の緒……13
第三十一章　生まれる鍵……81
第三十二章　震える玻璃……129
あとがき……200

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との戦いに尽力していた。

ラエスリールは、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女はなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

翡翠の妖主の守護者の罠によって浮城を追放されたラエスリールは、数々の死闘の末、この世に五人しかいない妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼす。父の配下の魔性に命を狙われ、紅蓮姫奪還チームに追われ、行き場のなくなったラエスリールは闇主とともに逃亡していた。しかし突然現れた父によって喉元に手をかけられ仮死状態に陥り、その肉体は浮城最奥に紅蓮姫の「鞘」として収められた。紅蓮姫の第二の使い手として選ばれたのは、紅蓮姫奪還チームの一人であるアーゼンターラ。そんななか誕生した第六の妖主（雛の君）が次々に妖主たちを配下に従え、ある目論見を実現させようとしていた。一方で、死んだはずのラスの母チェリクが娘を永い眠りから目覚めさせていた――！

ラスの意識が封じ込められていた黄玉を、紫紺の妖主とアーゼンターラの闘いの最中、ターラの護り手・蜜里が噛み砕いて――!?

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

白 **白焔の妖主(白煉)**
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。



紫 **紫紺の妖主(藍絲)**
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。

夫婦?

第六の妖主(雛の君)
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

娘



息子

ラエスリール(ラス)
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。

懐いている



邪羅(ザハト)
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。



アーゼンタータ(ターラ)
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン(トーン)
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

双子

オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。



スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

マイダード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

チェリク(リーク)
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

親友

夫婦



マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。

息子



乱華(リーダイル)
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。



濫花(リー)
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。

懐いている

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。



闇主(千禍)
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

護り手



セスラン
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?



彩糸
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。



サティン
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第三十章　解れた糸の緒

1

がり、と――固い何かが砕ける音が響いた瞬間、ラエスリールは自分が仮初めの器――強固な檻とも言える――から解放されたことを知った。

そこに宿っている間、常に意識を搦め捕るような薄膜がかかったようにしか感じられなかった外のことが、はっきりと認識できたことでもそれは確かなことに思えた。

だが……鮮明になった感覚が捉えた光景は、衝撃的すぎて、即座に理解することができなかった。

幼い妖貴の少女が誰か、ラエスリールはすでに知っている。

自分を宿した黄玉を懐に抱き続けてきた黒髪の娘の気配は、この一年ほどですっかり馴染んでしまったものだ。

名は……確か蜜里というのだ。

ずっと頭の中にかかっていた靄が晴れた今、事態を把握するのは容易いことのはずだというのに――それがかなわないのは、やはり目前の光景のあまりの異様さのせいに違いない。

蜜里の前に立つ紫紺の髪の青年と、その背後の壁面を埋め尽くす無数のヒトガタ――磨き上げられた貴石の床に、縫いつけられたように倒れ込んでいる見知った元同僚たち。

これは、何だ――何なのだ。

自由を得た喜びよりも、驚きと困惑が大きかった。

だが、彼女はそれ以上その場に留まることはできなかった。

仮初めの器が破壊されたと同時に、彼女の意識は本来戻るべき肉体へと強制的に引き戻されたのだ。

母であるチェリクの肉体への引力の比ではない。

待て――。

せめて事情を少しでも知りたいと……そのための情報を僅かでも得たいという思いも、引き戻される力を振り切ることはできなかった。

どうなっているんだ。

これは――。

その場から魂が引きずり出される寸前——最後に彼女が認めたのは、藍絲の背後で床から必死に起き上がろうとしている銀髪の少女の姿だった。

圧倒的な力に押しつぶされそうになりながら、懸命にその重力に抗おうとしている彼女の右手には、見慣れたなどという言葉では到底片付けられない真紅の破妖刀が握られていた。

紅蓮姫。

長く——長く。

実際に流れた時間以上の密度で、ともに在り、ともに戦ってきた相棒とでも呼ぶべき存在。

彼女が悲鳴のような声を上げて、自分ではないひとを選んだ時のことは忘れられない。

ラキス——！

どれほど恋い焦がれてきたのか、どれほどその魂を希求していたのか——胸を締めつけられるような魂の叫びを聞けば疑う余地もなかったあの声。

その、ほぼ間もなく、暴走した彼女を無理矢理我が身に迎え入れはしたものの……その彼女が今、自分ではない者の手にしっかりと握られているということは。

その意味は。

彼女は。

見つけたのだ、紅蓮姫は。かつて失った最愛にして唯一の魂の伴侶を。
そして、その傍らにあることを選んだのだ。
不思議と動揺はなかった。
紅蓮姫自身が選んだことであるならと、無理矢理心に言い聞かせたわけではない。そうではない……そうではなく、彼女がずっと求め続けてきた相手が見つかったのならそれはそれで喜ばしいことだと、ラエスリールは心から思った。
だが、事情がわからないながらにも、この目にした光景が尋常でないことはわかる。
紫紺の妖主の居城璃岩城で、床に縫いつけられた格好の浮城の戦士たち。
何より広間の壁面を埋め尽くす数え切れないヒトガタ……生ける人形たち。
これは。
肉体を持たぬ身ですら、総毛立つような感覚を覚えた。
これは、絶対的力を有する紫紺の妖主を相手にした、絶望的な状況ではないか⁉
自分もかつて、かの妖主とは相対した。
だがあの時、彼は気まぐれの延長で手を伸ばしてきただけだったように思う。
自分の影を奪い、人形に変えようとはしていたが、あくまで暇つぶしの娯楽として、彼は遊

んでいたように思えてならない。
思いがけぬ結果となったが、そこに彼が必死になる場面はなかった。
だが、これは——この光景は。
何がどう、どこが違うのかを指摘することはできない。
だが、明らかに何かが違うのだ。
空気が違う。紫紺の青年を包む空気が、以前自分が対峙したときのものとははっきりと違っているのだ。
これは彼の本気を示すものなのか——いや、そうではない。
紫紺の双眸に浮かぶ光には、心底から満足する色が宿っている。
なにに？
わからない。
そう思った瞬間、彼の眼差しが形もない自分に向けられたのを感じた。
その瞳に浮かぶのは苛立ち。
声ならぬ声が、その時聞こえた。
——何をしている。行け。戻れ。

その思念が彼女を引き戻そうとする力をさらに強くした。
引き戻される——気になるこの状況の把握はまだできていないというのに、否応なく今度こそ、猶予もなく……本来在るべきところへと。
だが、ラエスリールはその力に唯々諾々と従うわけにはいかなかった。
目にしてしまった、この状況を何一つ理解できぬまま離れることなどできるはずがない。
このままでは、数え切れないほどの命が犠牲となりかねない。壁を埋め尽くす数万に留まらぬ未完成の人形——ヒトガタの数に加え、今、力で床に押さえ込まれている知己を含む浮城の住人たち。
何が起こっているのか——否、違う。
何かが、起こっているのだ——これまで自分が想像もしたことのない何かが。
そのかけらだけでも拾いたいと思うのに、枷から解放され、さらには紫紺の妖主の後押しを受けた強大な力が自分をこの場から引き離そうとしている！
駄目だ、駄目だ、駄目だ、このままでは。
せめて、この場に戻る手がかりひとつも手に入れなくては——このまま、無為に遠地に放り出されるわけにはいかない！

そう、思った瞬間のこと。

まるで、ラエスリールのそんな思いに気づいたかのように、強い、強い意思の力がその場に満ちた。

いや、ぎりぎりのその段になって初めて、彼女が気づけたのかもしれない。

引き戻される——刹那の中のまさに最後の瞬間。

ラエスリールは床に倒れ伏す元同僚たちの中、ただひとり血が出るほどに唇を噛みしめ、頭を上げた少女の姿を見た。

美しい少女だった。

華奢な少女だった。

紫紺の妖主の力に晒され、地に縫いつけられた状況で、それでも起き上がろうとする……できるとは到底思えぬ外見をした、だがそれをなそうとする力を秘めた少女。

菫色の双眸に不屈の光をたたえ、どんな絶望的な状況でも諦めない、と——言葉ではなく眼差しで訴えているその少女を目にした瞬間。

ラエスリールのなかで、ひとつの記憶が眠りから覚めた……。

※

タスケテ。

空気に溶けきれない声をラエスリールが拾ったのは、もう五年近く前、二人の妖主を損ねた大罪人として数多の追っ手を持っていた頃のことだった。

常に追っ手に迫られる日々――その時も、逃げ切れずに対峙した翡翠の妖主の配下である妖貴と対決した直後だった。

受けた傷はともに在る深紅の青年のおかげで完治していたが、心に受けた傷はまだずきずきと痛みを放っていた。

『なぜ、お前が生き残るのか!?』

最後の命を散らす瞬間まで、自分に対する殺意と敵意を燃やし続けた妖貴は、最期の最期にそう問いにも似た叫びを放った。

『なぜ、我が君が散らねばならなかった!?　なぜ、今、ここにいるのがお前でなければならなかったのだ!?』

答えようのない問いだった。

少し意味の違う問いを、ラエスリール自身が翡翠の妖主自身に投げかけた際、答えとも言えぬ答えしかもらえなかっただけに、ずきずきと心は痛む。

なぜ自分たちが戦わねばならないのかと問うた自分に、心を決めた翡翠の妖主はきっぱりと答えた——生き残るためだ、と。

翡翠の妖主と自分——どちらかしか生き残れない運命の道にともに乗ったから、自分が生きるために戦うしかないのだ、と。

そう言われても、その真意を読み解くことはあの時はできなかった。何を言われているのかと戸惑いさえ覚えていた。

だが、そうであってさえ——。

彼女——翡翠の言葉に無条件に得心する自分もまた存在していたのだ。

なぜ、どうして、なにゆえに——。

数えきれぬほどの疑問が湧き出るにも拘わらず……因果も何も関係なく、確かに「そう」だと納得し、死闘に応じた自分が在った。

あの時、あの瞬間、それはなにより確かな拠り所を自分の中に見つけることができていたと思う。

だが、その瞬間を過ぎてしまえば……。

生き残るために死力を尽くしたことに後悔はない。翡翠の妖主の代わりに自分が死ねば良かったとも思わない。

ただ、翡翠が確固たる意思とともに告げた「どちらかひとりしか生き残れない」という言葉を鵜呑みにしてしまったことに、今さらながらに疑問を抱くようになったしまっただけのことだ。

妖貴はそこを突いてきた。

問われたことで、答えを未だ見いだせぬ自分を糾弾された気がしたのだ。

本当に、わたしはなぜ――。

翡翠と戦わねばならなかったのか。自分が生き延びた意味は何なのか。

答えの見つからぬ問いは、まるで刃のようにラエスリールの胸に斬りつける。

それを見いだすまで、この痛みは常に自分を苛み続けるのか――見いだした答えがこれに変わる刃と化すのか……。

そんなことを思いながら、唇を噛みしめたとき、その声は聞こえた。

タスケテ。

血を吐くような叫びだと思った。

絶望と恐怖に押しつぶされそうになりながら、一縷の望みにすがりつくような、声。

ミナ無事ディテ。とーん、間ニアッテ。アア、空ガアンナニ赤イ。怖イ。怖イ。コノ女ハ誰？　ドウシテワタシヲ狙ウノ⁉

まだ幼さを感じさせる悲痛な声に、ラエスリールは胸を掻きむしられた。

「闇主」

深紅の男に声をかければ、声に気づかなかったはずもない青年は、いともあっさり「却下」と答えた。

「闇主！」

「お前ね、ほんのさっき死にかけたばかりだろうが」

こちらを気遣うような言葉に、しかしラエスリールは騙されなかった。

気が進まないと言っているのだ。

「傷はおかげで治った。お前がイヤなら、わたしだけ近くに下ろしてくれればいい……いや、いい。勝手に下りる」

見たところ、さほど上空を移動している様子はない。無理矢理この場から引き離されてしま

う前に、下りて移動したほうが確実かもしれない。
幸い空が赤く染まっているのはここからでもわかる。魔性が絡んでいるのなら、紅蓮姫の声に従えば辿りつくのに苦労することはないだろう。
そう思い、男の腕の中で身を捩った彼女の耳に、深紅の青年の忌々しげな舌打ちが聞こえた——わざと聞かせているのだ。この男が大人げないのは今に始まったことではない。
「お前の腕は二本しかないんだぞ」
世界中で上がる悲鳴全部に応えられるはずがないことを、本当にわかっているのか？
不機嫌を隠さない男の言葉に、ラエスリールは「わかっている」と答えた。
「だが、聞こえた悲鳴を無視するのはそれとは違う。助けられるかもしれないひとがいるのに、知らぬ顔などできるわけがない」
きっぱりと言いきった彼女に、男が冷笑で返した。
「長生きしたいのなら、見て見ぬふりも覚えるべきだと思わないか？」
「人間には、できることとできないことがある。長話をしている暇はない。下ろしてくれるつもりがないなら……」
本気で飛び降りようとするのに気づいたのだろう、深紅の青年が彼女を抱く腕の力を強めた。

「闇主！」

「暴れるな。連れて行ってやるから」

仕方なさそうに告げながら、男は徐々に高度を落としていく――そして。

これまで感じたことのない不可思議な妖気を放つ存在から少し距離のある場所に彼女を下ろすと、赤く染まった空を見上げて別行動を取ると言い出した。

「村の様子はおれが見て来てやるよ。おれがそばにいないことをきちんと踏まえて、大怪我なんぞしないように心がけること」

「別に、大怪我したくてしているわけでは……」

ないんだが……声が尻すぼみに小さくなってしまうのは、先ほども人間なら即死してもおかしくない傷を負ったばかりだったからだ。

そうしなければ勝てなかったのだから仕方ない……が、自分が無茶をしがちなことはさすがに自覚しているのだ。

「肉を斬らせて骨を断つやり方ばっかりしてると、そのうち肉だけじゃなく骨まで叩き斬られるぞって言ってるんだよ」

皮肉を隠しもしない男の冷ややかな忠告に、ラエスリールは俯き、「努力する」とようやく

答えた。
そうとしか答えられなかったのだ……。

※

異様な妖気を辿るまでもなく、悲鳴の主を見つけるのは容易かった。
深い山中にも拘わらず、言い合うふたつの声が聞こえてきたからだ。
「なんなの!?　なんなの、お前は!?　なんであたしを狙うの!?」
甲高い少女の声には、焦りと恐怖が溢れていた。
「言ったろう？　我が君がお前を欲してらっしゃるのだよ。いい加減、観念おしな。挫いた足で満足に立つこともできないくせに、それでわたしから逃げられるわけがないだろう。殺しやしないのだから、おとなしくわたしの手を取るがいいよ」
獲物を追い詰めた猫を思わせる、残酷な愉悦を滲ませた声は、ぞくりとするほどの艶をたたえたものだった。
どちらが襲撃者でどちらが被害者か、考えるまでもなかった。

果たして――。

さらに足を進めた時点で、ラエスリールはふたりの人影を見いだし、その確信が間違っていなかったことを知った。

足を挫いたらしい十二、三の少女が、這うようにして必死に相手から距離を取ろうとしていた。

その足掻きを嘲笑うように、黒髪の艶麗なる美女――妖貴が、殊更ゆっくりと少女に近づいていく。

「できるわけがないでしょう!?　村を焼くだなんて……そんなひどいことを平気でやれる相手を信じられるはずがない！」

「村ひとつが何だというのかねぇ。たかが小さな蟻の巣じゃないか。とうに消えた命のために、自由に動けもしない身で足掻くその意味がわからないね」

まあ、お前がどれほど暴れても結果が変わることはないけれどね。

くすくすと絶対の優位を確信して喉を鳴らす妖貴は、すでに決定事項として、少女を手に入れるつもりのようだった。

少女の怯えも絶望も、妖貴にとってはちょっとした美味しい余興に過ぎないもの。

震える少女を嬲ることで、少しばかりの楽しみを得ているようにしか見えなかった。

「本当に、なんとやり甲斐に欠ける仕事だろう。ちっぽけな蟻の巣を灼き尽くして役に立つかどうかもわからぬ蟻の子ひとり……いや、念を入れてふたりか？　それっぽっちを手に入れるために駆り出されるだなんて、かつての我が身では考えられぬ屈辱だよ。いいからこの手をお取り、子蟻。あまりぐずるようなら、多少の八つ当たりをさせてもらうよ？　生きてさえいればかまわぬと、新たな君からお許しはもらっているのだからね」

素直にその手を取らぬなら、命を奪わぬ程度に痛めつけた後、連れて行く――。

はっきりとそう言いきった妖貴の言葉が耳に入った瞬間、ラエスリールは気配を消して相手の隙を衝くという案をあっさりと放棄した。

絶対的力を持つからこその魔性の傲慢は、すでに身に染みていたが、この状況で家族や知人の無事を祈りつつ恐怖と戦い、気丈に振る舞っている少女に対するものとしては看過できないと思ったのだ。

心を折る言葉だと思ったのだ。

絶対的優位を知らしめた上で、祈りや願いさえも踏みつぶす……それは、少女の心を殺す行為だと。

そんなことは許せないと。
させるものか。
なぜか、妖貴を前にしても食欲を訴えない真紅の破妖刀の様子に疑問を覚えるより先に、ラエスリールの足は一歩を踏み出していた。
「そうは、させない！」
茂みから飛び出し、彼女は、珍しく積極的に応じない紅蓮姫を我が身から抜き放ちながら――少女と妖貴の間に飛び込んだ。
「な……？」
「誰……？」
ふたつの声を正面と背後から聞きながら、彼女はきつく相棒の柄を握りしめた。
先ほどの死闘のせいか、紅蓮姫は大好物――上級魔性の命――を前にしながら、今ひとつ反応が鈍い。
それが気にならないと言えば嘘になるが。
それでも。
それでも、だ。

少女の悲鳴にかけらなりとも宿っていた願いと祈り――それを踏みにじらせることだけはできないと、思った。

闇主の言う通り、確かに世界中から溢れ出す魔性に苦しめられている人間全ての悲鳴に応えることはできないかもしれない。

けれど、自分は確かに少女の悲鳴を拾った。

そして、彼女を魔性の手にかけさせたくないと思ったのだ。

ならば、その自分の心を信じるしかないではないか。近視眼的判断と言われようと、自分には他の道を選べない。

この身が人間ではなく魔性であると知って久しいこの今でも。

ならば。

この心こそが道しるべ。

信じてラエスリールは黒髪の女性に――深紅の刃を向けたのである。

※

女は——黒髪の妖貴は、一瞬信じがたいものを目にしたかのように、大きな夜の闇のような瞳を瞠らせた。

突然の闖入者に反射的に不快感を示した直後の反応だった。

信じられない——これは何事なのだ。

声にならない思いが込められたようなその反応は、しかしすぐに消え失せた。

「あなたが」

告げられた声はただ、それだけだった。

代わりに投げつけられたのは——。

得体の知れぬ、なにか恐ろしい力、だった。

反射的にその場を飛び退いたラエスリールは、彼女の放った力をうけた場所が、黒く爛れ腐れ落ちるのを見た。

毒……いや、酸か？

昼間であれば確かなことがわかったかもしれないが、僅かな光しか射さないこの場所で明確に見極めることは難しかった。

「紅蓮姫」

敵意も露(あらわ)な相手を前に、いつもと多少様子の違う破妖刀に向かって呼びかける。
妖貴を相手にした場合、必ずと言っていいほど流れ込んでくる「美味(おい)しそう！」の声が今回は聞こえなかったのだ。
そればかりか、イヤがる素振りまで感じ取れる。
先ほどの食事で満腹になったのだろうか……？　一瞬浮かんだ考えは、過去を振り返ればまずあり得ない。妖貴の命を残らず平らげた直後に、妖主に対しても旺盛(おうせい)な食欲を発揮(はっき)した彼女が、あれくらいで満足できるとは思えない。
だとしたら、だ。
彼女が渋る理由はひとつしか考えられない。
……妖貴に見えるが、もしかして不味そうなんだろうか……？
それなら紅蓮姫が熱心でないのもわかるが、しかし。
だからといって、彼女の望みをかなえてやるわけにはいかない。少女を見捨てるなど論外だし、連れて逃げようにも闇主がそばにいない今、妖貴を振り切ることは無理だ。
そうである以上、戦いは不可避だ。しかも自分に敵意を叩きつけてくる妖貴に、背中を見せるのは恐ろしすぎる。

「いくぞ」

柄を固く握りしめ、宣言するが今夜の紅蓮姫はやはり彼女らしくなかった。

いやいやと言うように、柄をぶるぶると震わせたのだ——本気で嫌がっている。

「仕方ないだろう！」

叱りつけると、耳を疑うような声が流れ込んで来た。

いやだ、いやだ！　あんなもの食べたくない！

……どうやら、「不味そう」ですらないらしい。相手は妖貴としか思えないというのに、何が違うのだろうか。

だが、紅蓮姫の嫌悪感や拒絶の理由をのんびり考えていられるような状況ではなかった。

「声だけは勇ましいが、なぜ動かれないのです？　それは数多の我が眷属の命を啜ってきた悪名高き破妖刀でございましょうに……ああ、いいことを考えつきました。せっかくですから、その娘とともに、その貪欲な小娘も我が君のもとへ連れて参りましょう。手間が省けたと、我が君もきっと喜んでくださるはず……」

我が君——ということは、女は誰か妖主に仕えているのだ。

そして、目の前の銀髪の少女を、妖主の誰かが欲しているということだ。

誰だ。

真っ先に脳裏に浮かんだのは、人形作りをこよなく愛する妖主の顔だった。

紫紺の妖主――藍絲。

彼なら少女を人形とするために欲しがったとしてもおかしくはない――それほどに少女は美しい。

だが、彼が自分の作品の材料を、配下に揃えさせるとは考えにくい。さらには、彼が紅蓮姫を喜ぶ道理がない。

では、他の誰かだろうか。しかし、闇主は配下とは縁を切ったようだし――時々都合よくこき使っているため、配下たちはそうは思っていないようだが――自分が気に入ったものに対しては藍絲以上に他人に任せそうにない。少女のためにも、彼女を狙う妖主が自分の連れでないことは幸いに思えた。

残るはふたり――白焔の妖主と、王蜜の……。

だが、父である王蜜の妖主はまだ自由に動ける身ではないはずだ……千々に引き裂かれたも同然の、命のほとんどが流れ出した様子を思い出せば、人間の少女に関心を寄せる余裕はないと確信できる。

ならば……。

「白焔の妖主がこの子と紅蓮姫に何の用がある？」

そう問いかけた次の瞬間――。

女の喉から甲高い嘲笑が迸った！

「白焔の君！　あの気高く輝かしい御方が、こんな小娘を必要となさるはずがない！　なんということ……ああ、本当に何ということか」

そう答え、ぴたりと笑いをおさめた妖貴の全身から、漆黒の憎悪が噴き出すのをラエスリールは視たと思った。

「さてもさても奇妙な話だ。あなたがきっかけで生まれた御方を、あなたは未だご存じない？　あなたの為したことによって、生を受けたあの方のことを？　そして今宵、何も知らぬままこのわたしの前に立ち塞がろうと……？　何と滑稽な話だろう……あなたが救おうとするその娘は、他ならぬあなたの代わりに我が君が欲されたというのに！」

他ならぬあなたが、何も知らぬままだとは！

許せない――。

妖貴の声にならぬ声を、ラエスリールは確かに聞いた。

そして、女の全身から噴き出す憎悪と憤怒が爆発的に大きく膨らむのを感じてぞくりとするものを覚えた。

なんだ――この妖貴は何を言っているのだろう？

自分の知らぬ間に、何かが生まれ、そうして動き出した流れが、この少女を呑み込もうとしているのだと……そう聞こえる。

どういうことだ――？

喉まで出かかった問いを、けれどラエスリールは口にすることができなかった――憎悪そのものに染まった妖気の礫が、襲いかかってきたからだ。

ああ、と彼女は悟った。

先ほどの、妖貴の攻撃――あれは酸でも毒でもない。純粋なる憎悪と怨嗟で染め上げられた妖気だったのだ。

目の前の妖貴は、全身全霊で自分のことを憎み、恨んでいるのだ。

だが、その理由がわからない。彼女が主と呼ぶ存在を、自分が知らない――それだけのことで向けられる感情とは思えないのだ。

なぜ。

だが、尋ねることができない。それが女の怒りをさらに掻き立てるだけの行為にすぎないことを彼女は確信していた。

女の放つ憎悪と殺意が肌に突き刺さる。

殺してやりたいと、心底彼女が思っているのが伝わってくる。

だが、女の望みを叶えてやるわけにはいかなかった。誰かと争ってでも生きることを選び取ったあの日以来、少なくはない追っ手の命を散らせてきた。

恨みも憎悪も全て背負って、先に進むと決めたのだ。

この少女が自分のせいで襲われたと言うのなら、なおさらそれは譲れない。

「お前はわたしを殺したくて仕方ないようだが――」

女の嘲笑う声が彼女の言葉を遮った。

「殺したい？　そんなものですむものですか！　あなたのせいで生まれたあの御方によって、わたしは安寧の眠りから永遠に引き剝がされたのです。二度とあの海には戻れない……我が君が力に触れたこの身も心も、二度とあの場所には入れない！　愛しいひとも、やがて来るであろう知己とも二度と触れ合うことはできない……この身は、……するだけ！　それがどれほどの絶望か、あなたにおわかりか⁉　いいや、わかるはずがない……この呪わしい、この強力な

枷に囚われたわたしの心など」

あなたにわかろうはずがない！

ぎらぎらと憎悪の炎を立ち上らせながら、女がラエスリールに詰め寄った。

漆黒に染まった長い爪が喉を狙ってくる！

触れたが最後、憎悪と怨嗟で練られた瘴気が傷口から入り込んでくるのは必至――だが、背後に庇った少女の存在がある以上、ラエスリールはそれ以上下がることはできなかった。

受け止めるしかない。

「紅蓮姫！」

叫ぶように、破妖刀の名を呼ぶ。

だが、この段に至っても、紅蓮姫は妖貴の心臓を狙おうとはしなかった。

不意に、ひとつの仮定が浮かんだ。

まさか……美味い不味いの問題ではなく……。

「……食べられない、のか……？」

破妖刀は魔性の命を糧とする特別な刃だ。

そんな破妖刀が糧とできない命を宿す魔性など、いるはずがない――。

だが、沈黙で応える紅蓮姫に、ラエスリールは自分の問いが正鵠を射たことを知った。
紅蓮姫はこの妖貴の命を糧とすることはできないのだ。
いや、ここまで強い拒否を示していることを考えれば、彼女にとって有害な……正しく毒に等しいものなのかもしれない。
だとしたら、いつもの手は使えない。
次はご馳走を用意するから今は不味くても我慢しろ——毒だとわかっていて口にしろとはさすがに言えない。
妖貴の黒い爪が喉に迫る。
どうする——触れるだけで、毒となるのか。それとも命を奪った時点で紅蓮姫を脅かす存在となるのか。
ならば——。
「食べなくていい。紅蓮姫」
代わりに。
「砕け」
ラエスリールの声と、真紅の刀身と漆黒の爪がぶつかりあったのはほとんど同時のことだっ

た。

キン、と甲高い音が闇を切り裂く。

そして砕け、地に落ちたのは、妖貴の漆黒の爪だった。

その瞬間、妖貴の双眸に驚愕の色が走ったのを、ラエスリールは確かに見た。

ち、と舌打ちし、背後に飛び退いた漆黒の女は、さらなる憎悪を掻き立てられた様子で睨みつけてくる。

「なんて忌まわしいその瞳」

ぎらぎらと滾る憎悪を叩きつけてくる相手の真意はわからない。

だが――微かな天からの光が照らすだけのその場所で、ラエスリールの目は信じがたいものを捉えた。

紅蓮姫が断ったのは、妖貴の漆黒の長い爪だけだ。

その皮膚にかすり傷さえ負わせた手応えはなかった。

だというのに――。

「砕けと、ただ一言で破妖刀の力さえも変え、わたしを砕こうというのか」

唇を噛みしめながら、洩らす声は怨嗟に満ちていた。

だが、ラエスリールを驚かせたのは、女の凄まじいまでの激情ではなかった。
触れたせいか、視えるようになった妖貴の心臓の位置……否、その視え方が、それまで彼女が知っているものと全然違ったのだ。
紅蓮姫を通してラエスリールが視てきた魔性の心臓は、強弱や色彩の違いはあれ、これまで光とも輝きともつかぬモノだった。
淡いものもあれば、燃えさかる炎さながらの激しさをたたえるものもあった——全て、それらは光の塊として認められるものだったのだ。
だが、いま紅蓮姫を通して視えた女の心臓は——その姿は。
艶のない墨色の……闇ですらない虚を思わせるものだった。
紅蓮姫が強い拒絶反応を示したのも頷ける——あんなものを身に取り入れては破妖刀であろうと無事には済むまい。
正体を知らずとも、そう確信できてしまう異様な『命』を目の前の女は抱えているのだ。
「なん、なんだ……お前は。その命の在りようはいったい……」
戦いの最中であることを忘れるわけもなかったが、思わず問いが唇からこぼれ落ちる。
しかし、それは女の怒りをさらに掻き立てる火種としかならなかった。

「何か、と？　このわたしの在り様はどういうことかと、他でもないあなたが問うのか！」
感情を爆発させ、女がラエスリールに飛びかかってくる！
怒りに任せた攻撃には、得体の知れぬ恐ろしい力が宿っていた。
避けきれない！
必死に身を躱したものの、放たれた力の欠片がラエスリールの左足のつま先に触れた。
じわり。
ソレが彼女のつま先に宿る。
真っ白の生地にぽとりと落とされた墨がじわじわと広がるように……いや、これはそんなものではない。
黴が広がるように——というのが一番近い気もするが、だがそれでも正確とは言い切れない。
ソレはラエスリールのつま先を喰らい、そうして自らを育て、さらに彼女を侵食しようとしているのだ。
全身を侵し尽くすまでソレの勢いは止まらない——本能的に直感した瞬間、ラエスリールの右目が黄金の輝きを放った！
同時に考えるより先に言葉が世界に放たれる。

「この世界に虚の場所はない！　虚は虚のある世界に戻れ！」
刹那、金の光は言霊の力を帯びて輝き、広がった。
ラエスリールはつま先の恐ろしい違和感から解放されたことに、ほっと安堵の息をついた。
そして、紅蓮姫を握る指に力をこめ、対峙する妖貴に再び目を向けた時――。
彼女は信じがたい光景を、見た。
漆黒の女は、すでに妖貴としての姿を保っていなかったのだ。
虚と実が相争うかのように、肉体と虚ろな闇がその輪郭を奪い合っている。
何が起こったのか、ラエスリールには本当にわからなかった。
そんな彼女に、虚ろと実像をせめぎ合わせている妖貴が憤怒の声を上げた！
「虚をここに呼び出した元凶がそれを言うか！」
その場を凍りつかせるほどの怒号とともに、女が再度飛びかかってくる――力も計算も何もない、純粋な怒りのみを身に纏って！
「紅蓮姫！」
真紅の破妖刀にラエスリールは命じた。
「実体だけを砕け！　それなくして虚はこの世に在ることはできない！」

叫びながら、彼女は破妖刀を振るう。
左の瞳を金に輝かせながら――そうして、彼女の相棒たる破妖刀は、正確に彼女の言葉に応じたのである。
シャーン！
カシャン！
シャン！
女の憎悪と、女の虚と、女の怒り――。
ラエスリールの意志と、紅蓮姫の力、両者の想い――。
ぶつかり合って、空間には無数のガラスが砕け散るのにも似た澄んだ不可聴の音が響き渡った。
そして。
その場に在り続けることができたのは――。
その勝者たる人物は、しかし目の前で繰り広げられる光景に、息を呑むしかなかったのだ。
目の前の妖貴が崩れていく。まるで、支えを失ったぼろぼろの腐木のように――仮初めの骨組みを砕かれた塵芥の如く。

本能的な危機感で力を放った自覚はあった。

だが、その結果がこれだとは……こんなことになろうとは、数多の魔性と対峙してきたラエスリールにとっても想像もつかないことだった。

「な……」

声を失うラエスリールを前に、全身が崩れ落ちようとする妖貴はくつくつと笑う。

「何を驚いてらっしゃるのか。わたしの命核が虚に染まっていることを感じた時点で、あなたはこの世界のために何を為すべきか悟られたのでしょうに……」

そして、迷わずそう為された。

先ほどまでの怨嗟が嘘のように、その声には感謝に似た響きまで感じられた。

だが、続く声には憎悪はないが皮肉な響きが戻っていた——半ば嘆くような声音で、崩れ落ちながら、女は最期の言葉を紡いだ。

「だというのに、あなたは自分が何を為したかも知らぬままと来ている。この呪われた仮初めの現から解放してくださったことに多少の感謝を覚えぬでもないが、きっと詳細を告げることを恐ろしき柘榴の御方はお許しくださるまい……だから、ひとつだけお伝えしましょう。この娘はあなたの雛型。あなたの代わりとするために、最後に生まれた要石が選び、これから育て

ようとしている第二の鍵です。手に入れるための用意は周到で、ここであなたが何をしようがこの娘の運命は変わらない。柘榴の君も、そのために動かれることでしょう」

疑念という名の楔を打ち込み、妖貴はそのまま塵となった。

紅蓮姫が命を喰らったのではない。命を砕いたのだとも言い切れない。

なのに、なぜ、あんなことが起こり得たのか。

謎が多すぎる。妖貴の女が告げたことも含めて、考えなければならないこと、知らなければならないことが山ほど出てきた。

特に気にかかるのは、銀髪の少女に対する妖貴が残した言葉だ。

この娘はあなたの雛型。

第二の鍵。

これは、翡翠との戦いに起因して生じたことなのだろうか。

だとしたら、この少女はそれさえなければ、こんな恐ろしい思いを味わうことなく生きていけたのだろうか――。

少女は、先ほどより大きく赤く染まった空を食い入るように見つめていた。

艶やかな銀の髪は月光を紡いだよう、紫の双眸は極上の紫水晶以上に美しい。

幼さが抜けきれないとはいえ、彼女がどんな魔性に狙われたとしても、誰も疑問を抱く余地はないだろう。

だが、そうではないことを、ラエスリールは知ってしまった。

あの異様な妖貴の遺した言葉が真実なら、彼女が見舞われたこの不運の元凶は自分ということになる。

だが、家族を案じ、その無事を願い、自らの命を惜しんだ——人間として当たり前の想いを抱き、放っただけのこの少女と自分の間に、一体どんな絆……因縁があるというのか。

闇主なら、その答えを知っているのだろうか？

もしかしたら、だからこそ、彼はこの件に自分が係わることを厭ったのか——単に気が乗らないというだけの理由ではなく？

だが、もしそうだとすれば、それは腹立たしいことこの上ないことだ。

自分のせいで、誰かが不幸になるなど、そんなことは到底自分には看過できない——そう思う自分のことをよく知っているはずのあの男は、それを知りつつ自分をこの事態から遠ざけようとしたのだから！

あいつ……。

ぎり、と唇を噛みしめながら、ラエスリールは胸の内に怒りが湧き上がるのを感じていた。
戻ってきたら、絶対に問い詰めて白状させてやる！
固く固く心に刻んだ決意は、しかし実現されることはなかった――。

※

「やー、なかなかの火力だよな。ちょっと感心しちまったぜ、あんだけの火力なら、骨も残りやしないって」
能天気な顔と声で、当事者にとってはこの上なく残酷なことを開口一番に口にした深紅の青年の深紅の頭を、無言で思い切り拳で殴りつけたのは……まあ、条件反射というものだった。
次いで怒りが湧き上がる。
その村の住人である少女にとって、それがどれほど残酷な言葉であるのか、わからぬはずもなかろうに、この言いぐさはなんたることか！
「お前というやつは！」
思いやりとか気遣いとか心遣いとかはないのか!?

茫然自失の状態にある少女への気遣い皆無の深紅の青年に対する怒りが膨れあがる。

本当に、この男と来たら時々妙に優しいくせに、そのくせ妙に冷たいことがある。自分が関与しているか否かがその境目であることには気づいているが、関与していてもこうした無神経な態度をとることも珍しくはなく、それゆえにラエスリールは男への対応に苦慮することが多い。

「それがわざわざ村の様子を見に行ってやったおれに対する態度か⁉　お前が気にするだろうからと、無茶するお前から離れる危険を冒してまで、わざわざ出向いてやったってのに⁉」

……物凄く恩着せがましい台詞に、しかしラエスリールは一瞬言葉に詰まった。

これまでも、実は何度……いや、累計すれば十数度……いや、二十数度……いや、もしかしたらそれ以上か――ラエスリールが引っかかった魔性関連の騒ぎで、彼が別働して情報を集めてくれたおかげで助かった事例は数え切れないほどあるのだ。

何度その情報のおかげで命を拾ったかもしれない。

だが、今は……故郷を灼き尽くされた少女の耳に届く場所で、口にするのはいかにも不適切な言葉の羅列をあえて選んでいるような男の行動に、ラエスリールはやはり自分の鉄拳制裁は間違っていない、と思い直した。

そして、同時にすとんと、はまる感覚を味わった。
普通の、当たり前の図式ではない、普通ではあり得ない図式でこそ感じる――「ああ」と納得する感覚。
それを感じた瞬間、ラエスリールは確信した――深紅の青年が、あえて誤魔化すためにこのふざけた言動を演出しているのだと。
「お前……知ってるんだな」
斬り込んでも、相手はびくともしなかった。
「何のことだ？」
空とぼけて白を切ろうとする。
だが、この反応こそが、ラエスリールにとっては確信をもたらしたのだ。
この男は知っている――きっと、あの女妖貴の不自然な在り方も、そしてその魔性の脅威から守ったばかりのこの銀髪の少女に課せられた意味すらも。
「闇主！」
思わず叫んだ。
なぜだ、なぜ!?

なぜ、隠すのか。
なぜ、明かそうとしてくれないのか。
自分はそれほどに頼りない存在なのか？
声にならぬ問いに応えるように、男がにっと口元を歪めた。
「ああ、まだだ」
まだ、全然足りない、足りないよ――。
その声がどんどん遠ざかっていくのがなぜか、ラエスリールには理解できなかった。
だが――。
いつの間にか、距離があったはずの彼とのそれが無と化しており、彼の歌うような声が耳元で囁かれる段になって、彼女は危機感を覚えた。
それは、かつて何度か望みもせぬのに味わわされた感覚だった。
記憶を――塗り替えられる！
「止めろ、闇主！」
必死に叫んだ。
だが、深紅の青年はそれを拒否した。

「お前にはまだ鍵が足りない。鍵を与え得るあいつもまだその気がない……そうである以上、お前がこの場で得た知識はまだ時到ってない。忘れてしまえ」

絶対的な力に押し流され、ラエスリールは記憶を――強制的に手放させられたのである！

2

意識が現実に浮上し、肉体の瞼が上がったそこに、ラエスリールが見いだしたのは知らぬ空間だった。

見覚えのない天井――室内の在り様。

身を起こすのに抵抗を覚える……なかなか自由にならない肉体。

まるで……ずっと動くことを忘れていたかのような。

身動き一つ自由にできない。

苛立ちの中で彼女が唯一できたことは、己が覚えた疑問を口にすることだけだった。

「ここは――？」

思わず洩らした疑問の声に、答えてくれたのは顔だけは知っていても、出会って以来声らしい声をかけ合った覚えのない者たちだった。

決して自分に近づこうとしなかった……紅蓮姫に選ばれてからは忌避するばかりだった、浮城の護り手たち。

彼らがなぜか、自分のことを嬉しそうに見つめながら、答えをくれることに彼女は戸惑いを覚えた。

だが、以前とは違い、彼らの身に纏う空気の色が、今のラエスリールには視える。

彼らが、真実自分の目覚めを喜んでくれているのが空気を通して伝わってくる。肌から染みいってくる感覚を疑う余地はなかった。

ああ、と彼女は吐息とともに悟った。

自分が気づかないだけで、彼らは常に自分のことを気遣ってくれていたのだ、と。そのことに気づけぬほどに自分が心の殻に籠もり、さらには彼らと近しくする機会のない悪条件が揃っていただけなのだ、と。

あの身勝手な柘榴の妖主に徴をつけられ、護り手の命すら脅かす最強にして最凶の破妖刀紅蓮姫に選ばれた自分に、彼らが気安く近づけるわけがないのだ。

今となれば、そのことがわかる。

だが、そうとは知らず、理解も及ばなかった昔は、自分は拒まれ、厭われているのだと思い

込んでいた。

それを理由に、自分を正当化していたのではないだろうか。

自分は何も悪くない——と。

傷ついたことのあれこれの原因が他者にあったことを言い訳に、自分は自分の傷を癒すことやそうして改めて世界に向き合うことから逃げていたのではないだろうか。

他者や周囲のせいにすることは容易い。

傷つけられたという一事でもって、殻に閉じ籠もることは本当に容易いのだ。

けれど——。

世界に在るのは、傷つける存在だけではない。

愛しみ、愛情を傾けてくれる存在だとて同じほどにいるのだ。

セスランやサティンやマンスラムのように、特出した愛情を惜しみなく注いでくれるわけでもなくとも。

未熟な自分が気づけなかっただけで、自分のことを気遣ってくれていた存在はいつだっていたのだ。

傍目にも明らかに、自分を擁護してくれた人たちの存在があって、壊れかけていた心は保た

れ守られた。

けれど、本当は——目に見えないさまざまな助力があってこそ、自分は今の自分になれたのではないかと思う。

なぜなら——以前は味方などいないとしか感じられなかった浮城の護り手たちの気配が、こんなにも優しく感じられるのだから！

「あなたたちは、こんなにも優しいのに……わたしはそのことに気づくこともできなかったんだな……不甲斐ない」

申し訳ない。

ぺこりと頭を下げた彼女に、氷室に集まっていた護り手たちは慌てた様子で封魔鈴の手纏を差し出してきた。

「……これは？」

問いかけたラエスリールに、浮城の護り手たちは、それがチェリクからの預かり物であることを告げた。

チェリクが以前、この結界に侵入してきた際、「ラエスリールが目覚めた時のために残していった物」なのだと。

封魔鈴の手纏――。

紅蓮姫が手元にない現在のラエスリールを助ける唯一の存在を護り手たちに委ねてくれた母チェリク。そして、それを自分に渡してくれた護り手たちに、ラエスリールは心からの感謝を捧げた。

「ありがとう……本当に」

自分はこれほどに愛されてきた。

これほどに大事にされてきたのだ――。

そう気づくことができて、本当に嬉しかった。

そして、だからこそ――。

行かなければならない、と彼女は思った。

仮初めの器たる黄玉を砕かれた瞬間に視えたあの光景――そして、それをきっかけに甦った五年前の記憶。

ぎり、と思わず歯を噛みしめた。

闇主――あの、男！

怒りにぶるぶると全身が震え、手纏の鈴が音をたてる。

二度ばかりか三度までも！

勝手に記憶を書き換えて、素知らぬ顔をしていたのだ、あの男は！

追われる日々のなか、何かが起こっていると感じる度に、男には尋ねたものだ――「妙な感じがする。何か知らないか？」と。

その都度男は空とぼけるか、まだよくわからないと答えていた。

五年前にはすでに全部ではなくともおおかたのことは知っていたくせに、だ！

そのくせ、そのくせ……先日の憤ろしい記憶までも鮮明に甦り、ラエスリールの色違いの双眸には怒りの炎が燃え上がった。

見たこともない黒髪の少女を心から案じる様子を見せ……口元には笑みをたたえ。

あの時は、大きすぎる衝撃に気づかなかったが、今ならわかる。あの男が、あの時、自分の気配に気づかなかったはずがない。

わかっていて、わざと見せつけてきたのだ！

その結果、引きずり出されたラエスリールの凶暴な衝動が、彼の望んだものかどうかはわからない。正直わかりたくもない。

だが、自分がまんまと男の策に乗せられたのだとしたら――こんなに腹立たしいことはない。

衝動のまま、望んだ内容は、今も変わりなく心に根付いている。
あの男を取り戻し、生涯この命ある限り、自分のものとする。
決意は揺るがない。
相手が自分を単なる玩具と見なしていようが、知ったことではない。
嘘とも真とも、泡沫の想いとも真摯なそれとも明らかにされていない。
前者らしい言葉も、後者らしい言葉も、幾つも耳元で囁かれた。
男の本意がどちらにあるのか、全部の記憶を浚っても判断することはできない。もしかしたら本意などないのかもしれない。
それでも——動かされたこの心の在りようはすでに決まった。
やりたいこと、成し遂げることもすでに決めた。
だが——だが、だ。
心に一つ、新たな誓いを抱く。
闇主……お前が実際のところ、わたしになにを望んでおろうと、そして、わたしの心が定まってしまおうと、これだけは——譲らない。
固い決意を以て、ラエスリールはひとつを心に決した。

無論、意地だけでなく、自身を取り巻く状況もあっての決断ではあったのだけれど。

お前を取り戻し、わたしのものにするのは――。

昂然と頭を上げ、封魔鈴の手纏を手に巻き、ラエスリールは周囲を取り囲む浮城の護り手たちに問いかけた。

「呼びたい相手がいるのだが、この結界内に呼び出してもかまわないだろうか？　それとも、一応ここから出てから呼んだほうが？」

どうやら、どちらにしても難ありの問いだったのか、護り手たちが集まって相談を始めた。

ややあって、相談の結果を出したらしい護り手たちの答えは「せめて、この結界の内で」だった。

予想と反した答えに、ラエスリールは「いいのか？」と問うた。

彼らの責任問題を考えれば、この結界の中での呼び出しは問題があるのではと思ったからだ……一刻を争う状況だという焦りから、無理な注文をつけたという自覚があっただけに、了承されたことに逆に不安を抱いたとも言える。

そんな彼女の反問に、護り手たちは年長者の余裕とでも呼ぶべきものを漂わせ、こう答えたのである。

「この室の中でのことなら、チェリクが条件を広げている。何があろうと、お前がこの場を去らない限り、この場で起こったあらゆる事態を我らが今の長に報告する義務はない」

つまりは、ラエスリールがこの場を離れた瞬間、護り手たちには上司に対する報告義務が発生するということだ。

ならば、その義務が発動する前にやれるだけのことはやって行け――。

そう唆されているような気がするのは、果たしてラエスリールの気のせいだろうか。

いや、きっと、違う。

護り手たちの、この融通の利きすぎる言葉の奥に、彼女は実母だとか義母だとかの影響を感じずにいられなかった。

何と有り難い配慮だろう。

その言葉に甘えることにし、今一番駆けつけねばならぬ場所に至る早道の鍵となる存在の名を唇に乗せながら、彼女は自分を振り回す男に対する報復とも決意ともつかぬものを心に刻んだ。

闇主。

出会って以来、自分の心を救いもたたき落としもした男。

誰よりもこの心を揺り動かす男。
ああ、認めよう――認めるしかない。
お前以上に、この心を揺さぶる者はない。
お前以上に、この心に安らぎも嵐も持ち込む者はいない。
その安らぎが偽りであろうと、嵐がお前の娯楽に過ぎずとも――。
最早、関係ない。
この心はすでにお前に縛りつけられた。
だが、だからこそ。
ラエスリールの口元に、これまで誰も何者も目にしたことのない艶やかな笑みが浮かんだ。
「お前のことは、一番後回しにする」
やるべきこと、そう思えること――全部、全部すませた後でなければ、お前には向き合わない。
それまでは、たとえお前を目にしても無視してやる！
そうは思っても、あるいはそれすら男にとっては範疇内のことでしかないかもしれないと思えば虚しさが胸に湧き上がるが、これはもう自分の足場を信じるか否かの問題だ。

今、自分に見える、わかる——絶対に立ち入らねばならないと感じる足場。
十万の人間の命がかかっている場所で、必死に戦っている浮城の人間がいる。
自分もまた、そこにいた。
十万の命を救うために、そこにいた。
ならば——黄玉に封じられていたとしても、そこに自分が在った以上、あれは自分の戦いの場でもある。
行かねばならない。
どうあっても。
そのために。
彼女はあの戦いの場所に到るための唯一とも言える知己（ちき）の名を口にした。
「邪羅（じゃら）」
と——。

3

その声が聞こえた瞬間、邪羅はそれが何かの間違いか、自分の強すぎる期待が呼んだ幻聴ではないかと思った。

『邪羅』

自分を呼ぶ決然たる響きに満ちた、他の誰にも真似できない響きを纏う、声。

それは、出会って間もない頃、強大な母の声に支配されていた時、何度も何度も呼びかけてきたそれに似ていた。

いや、声だけではない。

人間として出会った自分の名だけを繰り返し呼び続ける想いと力。

魔性としての自分を無理矢理目覚めさせられ、その力と在りように振り回されていた彼に、届けつづけられた、ただひとりの祈りと願い。

人間であろうが魔性であろうが関係ない。
魔性としての殺戮の誘惑に負けてはならない——生まれも育ちもなく、ただ自分自身であることを間違えるな。
叩きつけられたその想い——強く眩く、魂に灼きつけられた。
呼ばれた名はあの時は「ザハト」だったけれど。
あの時、本当の意味で邪羅という存在は生まれたのではないかと思う。
母である白焔の妖主に、魔性としての真名を呼ばれた時ではなく——自身を人間だと信じていたザハトも、純粋な魔性である邪羅も、ふたつの在り方に矛盾などはなく、どちらであろうとそれは自分なのだと。
あの瞬間、自分のなかで意識すらしていなかった矛盾は霧消した。
人間として生まれ、自らを人間だと信じていたザハトと、白焔と紫紺の妖主の間に生まれた純粋な魔性である邪羅と。
本来であれば引き裂かれてもおかしくないほどの矛盾に満ちた存在であるはずの自分が、すとんと落ち着く場所を得た。
そのことに深く考えることがこれまでなかったのは、いくら考えたところで答えを見いだす

ことができないことを、心のどこかで知っていたからだ。
そう、してくれたラエスリール自身にその自覚がない以上、何をどう考えても意味のないことだった。
だが、同時に心のどこかで知っていた。
人間としてのザハト、生粋の魔性としての邪羅――この両者が並び立つ立ち位置など、本来であれば両親である妖主たちであっても、見いだし彼のために用意することはできなかったに違いないことを。
人間として生まれて育ってきたザハトとしての意識、そして生まれながらに魔性であった邪羅のそれ――どちらかを消し去り、どちらかを選ばざるを得ないその選択の幅を、広げて変えてくれたのはあの不器用でどうしようもなく優しいひとだった。
本人に、そんな大それたことをしたという自覚はないだろう。
彼女はいつも、自分の至らなさ、不甲斐なさを嘆いていた。
しかも傍には、そんな彼女に自覚を促すどころか、時に記憶を改変してまで悟らせまいとする厄介な男がついていた。
彼女自身が、その男を容認していたがために、本気で排除に走ることができなかった――実

力的に、難しいことはわかっていたが、それでも彼女が望むなら、両親の協力を得た上で、さらに玉砕覚悟で臨めば何とかなるのではないか……とは思ったのだが。

結局彼女はそれを望まず、結果、自分はほとんど彼女のためには何もできぬまま歯噛みすることになったのだ。

そうして、かれこれ二年が経った。

ガンディアの王宮で会ったのを最後に、ラエスリールは心身を凍結した。

遺体としか思えぬ彼女の肉体は浮城の氷室に保管され、魂の行方に至っては彼女の実母の手に委ねられた。

己が無力さにあの時ほど歯噛みしたことはない。

このまま自分は彼女のために何もできぬまま無為に時を費やすのかと――己が存在の意味すら改めて疑ったこともあった。

だが、自分の世界が彼女だけでできているわけではないことを教えてくれたのも、他ならぬ彼女で。

本来敵対関係にあるはずの浮城の住人たちの中には、自分と同じぐらいに彼女を愛し、案じている者もいて、彼らとはある意味他の誰より気が合って、そうこうするうちに彼女とは別の

意味で放っておけない大事な少女もできたりして。
その一方で彼女のおかげで縁が復活した両親とも、それなりにつきあうようになって、いろいろなことを教えられたり――中には知りたくないものも含まれていたが――本当に、世界は格段に広がった。
そうして広い世界を前にした時、邪羅は自分がすでに彼女のためだけに動けない自分というものに気がついた。
彼女のおかげで増えた、様々な大切なものが、彼にそれを許さないのだ。
両親……は、まあ放っておいたところで大事はなかろうが、金髪の勝ち気な少女とか、負けず嫌いですぐ手が出る凶暴な性格の少女だとか、外見能力言うことなしのくせに、性格のせいで危なかしくて黙って見ていられない少女のこととか。
何かあったら、放ってはおけない存在が増えて、彼女のためだけに動くことはもうできなくなってしまった。
以前、そのことを対峙する妖貴に詰られた。
二者を選んだ身で、唯一の者を選んだ自分にかなうはずがない、と。
魔性の力は想いの強さと密接な関係がある。

ふたりに想いを振り分けた邪羅に、ただひとりを想う自分が負けるはずがないと、黒髪の美しい少女は言いきった。

その時、彼はその言葉に真正面から反論することができなかった。

ただひとつ——ただひとりを選び切れぬ自身の在り方に、もしかしたら疑問を抱いていたのかもしれない。

だが、今なら違う。

そうではないのだと、他ならぬ彼女が教えてくれた。

不器用で優しくて、一度懐に入れたならひとりも取りこぼすことを自身に許さない、傍目には弱点ばかりのあのひと——。

だが、それは決して弱さではないのだと、いつの頃からは邪羅は気づいた。

誰ひとりとして見捨てられない——のではなく、誰ひとりとして失う気がないのだ、彼女……ラエスリールは。

ある意味、彼女ほど貪欲な存在はないと言える。

知り合った誰もを、彼女は我がものとし——その種類はさまざまとしても——決して手放さない。

想いの強さが力に影響を与えるというのなら、彼女ほど貪婪に力を集めている者はいないだろう。

そして、そんな彼女の手の中に、自分も含まれている。

だから——わかる。

彼女がいつまでも強いられた眠りのなかで落ち着いていられるわけがない。懐に入れた数多くの大事な者たちのいずれかに危機が訪れれば、彼女は必ず眠りから覚める。

わかってはいたが、彼女にかけられた枷の複雑にして繊細、さらには強大な様々な仕掛けが、それを容易く許してはくれないだろうことも確信していた。

それゆえに——唐突な彼女の呼び声をすぐには信じられなかったのだ。

しかもその声は、浮城内部から放たれた。

仮初めの器として居候している彼女の実母がいる場所でなく。

先日癇癪を起こして力を思い切り解放したせいで、護り手たちの自分に対する印象はかなり……最悪に近く、悪い。

まあ、無理はないのだが……感情のままに浮城に亀裂を入れたのは先日のことだ。浮城とその住人を守ることを第一とする護り手たちの横っ面を思い切り叩いたに等しい行為でもある。

報復とまでは行かずとも、意趣返しの罠という線は大いに考えられる。
セスランやサティンたちにさんざん叱られ、それなりに反省してはいるものの、それは邪羅の問題であって、護り手たちの心境とは関係ない。
罠か？　罠かも。一対一はもちろん、一対複数でも負ける気はしないが、浮城の護り手のほとんどが手を組んだとしたら厄介かもしれない。単純な力だけなら、それでも劣らぬ自信はあるが、経験の積み重ねという点で、自分が彼らに至らぬことを邪羅は知っていた。
どうするか、本来ならば迷う必要はない。
行って見て、罠なら突破すればいいだけのことだ。多少時間がかかろうとも、結局は何とかなるとわかっている。
問題なのは、この今の状況だ。
世界中の空気がぴりぴりと張り詰めている。
何が起こってもおかしくない緊張感が世界を支配している——この、今。
この呼び声に応じて、その結果、取り返しのつかない事態になったとしたら？
らしくない父——紫紺の妖主の仕掛け、出向いたアーゼンターラたちの安否、その裏で蠢くいまだ現れぬ強大な存在……第六の妖主。

「ううぅ」

歯ぎしりしながら、邪羅は必死に考えた。

考えなければならなかった。

それが、唯一でなく、複数の大事なものを抱えこむことで生じた対価だった。

……不都合だとは考えたくない。

が。

おれぐらいの抱え込みでこんだけ悩まなきゃならないんなら、姉ちゃんって、どんだけぐるぐるしたんだか。

何しろ相手は何がきっかけで懐に入れるかも、さらにはその上限があるかどうかもわからぬ謎の生物だ。しかもその懐に詰まっている面子というのが曲者揃いと来ている。さらに言うなら現在の懐内部にどれだけの存在が詰め込まれているかも謎のままだ。

ふと、邪羅の脳裏にあり得なくもないだけに、ぞっとする考えが浮かんだ。

懐に入れることはあっても、捨てることを知らないラエスリールが、行く先々で出会った人間を片っ端から懐に入れたら——というものだ。

それは、どれだけの葛藤を受け入れることを意味するのだろう。

うわぁ、おれ無理。絶対、そんなこと無理！

ラエスリールに思いを馳せた結果、呼び声のことを忘れかけてそんなことを考えていた彼の耳に、再び「声」が届いたのはその直後のことだった。

『……邪羅？』

その響きに、彼の脳裏に浮かんだのは、不思議そうに、少しばかり不安の色を双眸に乗せて首を傾げる黒髪の女性の顔だった。

心の声まで聞こえてきそうだ。

何かあったのだろうか？　もしかして都合が悪いんだろうか？　いや、まさか大変な状況にあって返事すらままならないのでは――!?

「うわあぁぁっ！」

直後、邪羅は奇声を放つと同時に、その声の主のもとへと駆けつけていた。

姉ちゃんだ、姉ちゃんだ、姉ちゃんだ！

こんな、自分のほうこそ大変な目にあって、きっと目覚めて間もないだろうに、他人の心配ばっかりして我が身を全然振り返らない、周囲の人間の心をしめつけるようなことしか考えないのは姉ちゃんしかいない！

他の誰にも真似できない――それがラエスリールの真骨頂だ。
そう確信して、彼女のもとに駆けつけた邪羅は……しかし。
自分の考えがまだまだ甘かったことを、直後に痛感することになる。
山ほど大事なものを懐にしまい込み、その全部のためにいつだって我が身を差し出しかねぬほどの優しさを発揮し、往々にしてそのために悩み苦しみ痛みを無条件に引き受ける――実に見ていて心臓に悪い黒髪の元破妖剣士は――だが。
一度こうと道を決めたが最後、周囲の制止などものともせず、一直線に駆け出して止まらない……猪突猛進のひとでもあったのだ。

※

感動の対面は、早々に切り上げられた。
『……邪羅？』
二度目の呼びかけに、ようやく現れた乳白色の髪と藤色の双眸を持つ青年は、勢いよくラエスリールに抱きつき「姉ちゃん！　会いたかったぁぁぁっ！」と思いの丈を伝えたのだが……

それに対してろくに返事もしないまま、彼女が己が望みを口にしたせいだ。

「邪羅、突然で悪いが、璃岩城に連れて行ってくれ」

感涙にむせんでいた邪羅にとって、これはかなり残酷な仕打ちだったかもしれない。

心配して心配していた相手と、ようやくのことで再会がなり、歓喜の思いに浸っていたところに、相手からの無情な要求。

実際、邪羅は恨みがましい目をラエスリールに向けてきた。

「姉ちゃん……ほとんど二年ぶりに会えた相手に開口一番その台詞って、酷くね？」

じっとりとねめつけてくる藤色の眼差しと声にこめられた迫力に、ラエスリールも少しばかり動揺した。

が、そこはあくまでもラエスリールのことだ。

あっさり「だったらすまない」と謝罪したものの、自分の要求を引っ込めることはしなかった。

「だが、お前にしか頼めないんだ」

……究極の切り札——脅し文句ともいう——を使っている自覚すら、彼女にはない。

邪羅は勿論、現在璃岩城で何が起こっているかは知っている。

ラエスリールの次の紅蓮姫の使い手としてアーゼンターラとその仲間が向かったことも、そこでおそらく両者が戦っていることも。

その戦いにあって、アーゼンターラたちが劣勢に立たされているだろうことも――ラエスリールの言葉を聞くまでもなくわかっていたことだ。

だが、どうしてもわからないことがある。

「何で姉ちゃんが行かなきゃならないんだ？」

アーゼンターラと紅蓮姫の縁は知っている。

彼女の前世が、あの凶悪な破妖刀の最初の相棒で魂の伴侶であったことは。

そのために紅蓮姫が二年前――ガンディアでラエスリールではなくアーゼンターラを選んだことも。

魔性と相反する立場にある破妖刀は、そのほとんどが魔性の命に対する食欲はあっても、それ以上の意志は持たない。もともとが人間の魔性に対する憎悪によって注がれた命に過ぎない破妖刀には、本来それ以上の精神的成長がないのだ。

自らの主によって注ぎこまれた怒りや無念、憎悪のままにその対象たる魔性の命を奪い、啜る。

それ以上の意味もそれ以下のそれもない。
だが、その枠から唯一はみ出した存在が紅蓮姫だった。
自ら意志を持ち、自ら使い手を選んだ。
その根本は、彼女が最初の使い手を愛したこと——否、順序が逆か。
愛した相手を自らの使い手に選んだ。
一度ラエスリールを選び、数々の修羅場をともにくぐり抜けながら、二年前、それを翻してアーゼンターラを選んだのは、彼女が紅蓮姫最愛にして最初の使い手であったラキスの生まれ変わりであったせいだ。
「行かなきゃならない義理なんてないだろう!?」
紅蓮姫はラエスリールでなく最初の主で恋人だった魂の主を選んだ。
言い方は悪いが、ラエスリールは捨てられたのと同じだ。
そうであるなら、彼女が今、璃岩城へ駆けつける義理などない。
ラエスリールの性格なら、それでも駆けつけようとするだろう——わかっていても、残酷な事実をつきつけてでも、邪羅は彼女を止めたかった。
ここで止めなければ、全ては最後まで押し切られてしまう。

怒濤のような奔流が全てを押し流してしまう。
それは直感であり、同時に確信だった。
だから、邪羅はラエスリールの言葉に従いたくなかった。
そのための理由を、だから必死に連ね上げた。
だが——そんな努力を積み重ねている最中でも、彼は何処かでそれが無駄なことだとわかっていたのかもしれない。
「邪羅」
一年以上氷室のなかで眠っていたはずの黒髪の女性は、そんな彼の足掻きとも見える抵抗を一声で封じた。
「わたしは行かなければならない。どうしても、璃岩城に行かなければならないんだ。そして、今、わたしを連れて行ってくれるのは、お前しかいないんだ」
なぜ、どうして。
理由を問えばいい。
なぜ、そんなことを思うのか。
その水先案内に、どうして自分が選ばれるのか。

いちいち時間をかけて、それらすべての理由を聞き出せばいい。
そうしたら、もしかしたら、思うだけの時間が稼げるかもしれない。
だが――。
結局邪羅はそうはしなかった。
……できなかったのだ。
胸を震わすどうしようもない不安が、ラエスリールという存在に一縷の希望を見いだし、縋ったのだと……後に彼は自覚した。
だが、それはあくまで後のこと。
その時は、ただ。
「わかった」
と、一言答えることしかできなかったのだ――。

第三十一章　生まれる鍵

1

浅い眠りに身を任せていたアーヴィヌスは、閉じた瞼ごしに感じられた淡い光に、一気に意識が覚醒した。

まさか……！

甦るのは一年以上前のこと――あの夜も、こんな淡い金の光に目覚めさせられたのだ。

浮城の最奥に位置する一室――城長の寝室は、当然のことながら最も厳しい結界と護り手たちに守られた場所である。

そこに、何の兆しもなく外部の者が入り込めるはずがないのだ……先日の闖入者のように、かつてのツテを最大限に利用し、護り手たちを言いくるめでもしない限り。

だが、あの時――そして今、この部屋に現れた相手は、浮城にツテなどいっさい持たぬ存在だった。

黄金の光とも闇ともつかぬ輝きを身に纏い、悠然と佇む青年の姿――相手が何者であるかなど、その色彩と存在だけで充分だった。
圧倒的な力が人間の形に凝縮した魔王のひとり――。
王蜜の妖主が、アーヴィヌスのすぐそばに現れていたのだ……。

※

何者だ――とさえ、アーヴィヌスは問いかけることもできなかった。
一目で正体がわかったからだけではない、その場を圧倒する空気に、声を絞り出すことがかなわなかったのだ。
絶対的力の主――世界中の魔性を統べる五人の妖主のひとり。
そんな存在と見える日が来ようなどと、アーヴィヌスはその日まで想像したこともなかった。
そして、現実に見えた今、この相手を敵と見なすことができぬ自分に呆然とした。
浮城を統べる者として、護り手以外の魔性を信頼するなどできるはずがない。妖主など、敵の首魁だ。最も恐ろしい敵と思わなければならない。

なのに、アーヴィヌスはそうは思えなかったのだ。

突然現れた王蜜の妖主が自分に友好的な空気を纏っていたからというわけでは決してない。

それどころか、青年の黄金の双眸には、感情らしいものは浮かんではいなかった。

対等な相手を見るような目を期待したわけではないが、そこに浮かぶ光は想像以上に遠い存在を見るそれだったのだ。

人間が虫を見る目よりも、隔たりがある。

妖主の青年は、ただそこに在るものとして、アーヴィヌスを見つめていた。彼が石であっても黴であってもあるいは星であったとしても、全く変わらぬであろう瞳の色――。

絶対者の眼差しに、彼はぞっとするものを感じた。

敵意も好意も関心もなく――ただ、在るものをあるがままに見つめる存在に、人間が一体何ができるというのだろうか。

こんなモノを相手に……。

怯むのでなく臆するのでなく、ただ圧倒された。自分の敵意も戦意も、目の前の相手には意味がないのだと、同じ空間にいるだけで思い知らされた。

だが、とアーヴィヌスはふと気になった。

これだけの絶対者が、なぜわざわざ自分を訪れたのか――どうしてもわからなかったのだ。

彼が浮城とその長である自分を敵視しているというのなら、理由も思い当たる。その圧倒的力の差異を見せつけることで、人間の意気を挫くというものだ。

だが、それはあり得ない。

そんな瑣末なことに、目の前の青年が動くことなど絶対にあり得ないと確信できてしまうのだ。

人間にとって、魔性に対する最強の盾であり、最強の矛である浮城は、しかし妖主にとっては何の障害にもならぬ程度の存在でしかないのだ。

その現実に打ちのめされながら、それでもアーヴィヌスは必死に青年の顔から目を背けまいとした。

それだけは、自分に許せなかったのだ。

魔性が強大なことは熟知している。漆黒の魔性――妖貴にすら、未だ浮城は数少ない例外以外の勝利を収めたことはない。さらにその上に位置する妖主と対決し、生き残った者など最早人外としか呼びようのないたったひとりしか存在しない。

アーヴィヌスは、自分がそのような特別且つ特異な存在でないことを誰よりも深く知ってい

た。

心弱く、異質や異端を恐れる余り排斥しようとする誘惑に抗えない弱者であることを、イヤというほど思い知らされてきた。

浮城の住人のほとんどは、その葛藤から無縁ではいられない。

人間を魔性の脅威から守りたい——そう思う一方で、魔性の強さに心惹かれ、眷属たる人間に自分より優れた者がいれば、憧れ、妬み、そのくせ最後の頼みの綱と思う……身勝手に揺れる心は、誰の中にもあるものだ。

そして、人間の中で最強と呼ばれる浮城の住人は、特にその揺れが大きいのだということを——彼は、身を以て知っている。

幼い自分の命を救ってくれた少女の、あまりにも人間離れした特異な力に、本能的な恐怖を抱いた。

魔性の命を難なく解くその強大な力に、人間のものではないと無意識に烙印を押した。

あれは化け物なのだから、とその力に理由をつけて——そうして、至らない自分への言い訳とした。

いや、違う……どう足掻いても、その域に達せない自分への慰めとしたのだ。

そして、そんな自分の雛型のような住人が少なくないことを知っていた。
特に、自分が化け物と認識する女性の忘れ形見である娘は、魔性の王を父に持つせいか、生来の気配からして異質だった。
人間もまた、動物であり異質なものは本能的に弾き出そうとするものだ。
浮城に迎え入れられた時、彼女はすでに人間の本能的排除の対象にされたあとだった。自分たちとは違うものだと感じ取った人間によって、彼女は手ひどく裏切られ、魔性への贄として差し出されたのだ。
運良く命を拾い、セスランによって連れられてきた彼女を前城長であるマンスラムは無条件に受け入れたが、アーヴィヌスはその時から危惧を抱いており、最後まで反対した。
一度、人間から大きく裏切られた半人半妖の少女――しかも、人外と思われた母と魔性の王を父に持つ娘だ。
人間への拭いがたい不信感を刻み込まれた娘を受け入れることは浮城にとって益のあることではないと確信していた。
その才を発揮する機会のない、気配に聡いとは言い難い一般人の中にあってさえ、異端と見なされ弾かれた存在を、浮城の住人が受け入れるわけがない。

いや、同情によって一度は受け入れたとしても、やがて開花するに違いない彼女の資質と力を目にすれば、今度は特出したその力に対する嫉妬と羨望ゆえに、彼女はきっと以前以上の裏切りに遭うだろう。

周囲からの裏切り——一度目は、こちら側に踏みとどまったとはいえ、二度目となれば、件の娘の心の天秤はどう傾くかわからない。

いや、まず間違いなく人間ではない、もう片方のそれに傾く。

浮城史上最高の能力者と、魔性最高の存在の資質をともに備えた子供が。

人間ゆえの弱さによって、人間にとって最悪の存在に変貌する。

それは、アーヴィヌスにとって、想像し得る最悪の未来図だった。

彼女にとっても、浮城にとっても。

だから、彼は常に浮城——人間を守るために力を尽くしてきた。

世界にとって、人間を守る上で、必要なのは確固たる信念を持った凡百の異能者たちなのであって、奇跡としか呼びようのない、周囲をも幻惑する力と輝きを放つ存在ではないのだという信念でもって。

現在の状況は、アーヴィヌスが思うより『奇跡的』な人材が多すぎるのだが、桁違いのそれ

が外れただけ、まだましだ。
この状態を、彼は保ちたいと思っていた。
人間の枠をぎりぎり外れぬ者たちが構成する浮城という組織を。
だからこそ――ここで目を逸らしてはならないと、必死に自分を律したのだ。
目前に佇む王蜜の妖主――絶対的、奇跡ですらない力を全身から放つ相手を前にしたのだとしても。
凡百の才を束ねる人間という存在に過ぎないとしても、決して目だけは逸らすまい。
この存在があるのだと、その事実からだけは自らに目隠しはすまい、と。
そんなアーヴィヌスの決意を、果たして目前の絶対者がどう思ったのかはわからない。
声すら出せぬ彼の、寝具から出された右の掌に。
ぽとりとそれは落とされた。
『それは骰子だ』
唇も震わせず、王蜜の妖主の声が脳裏に響き渡った。
骰子……これが？
落とされたそれを目に、アーヴィヌスは声にならぬ声で問い返していた。

それは、どう見ても、真球の黄玉だった。

多面体を模して数字が刻まれたり描かれてもいない。

本当に、傷ひとつない見事としか言いようのない黄玉だった。

いったいどんな意味を絡めて、これを骰子と言うのか——相手の真意は読み取れない。

だが、アーヴィヌスのそんな疑問さえも、相手にとっては意味を持たぬのか……黄金の美の化身は淡々と声ならぬ声を紡ぐだけだった。

『近く、生身の鞘の知らせもその耳に届こう』

生身の鞘？

この時点で、アーヴィヌスには真実王蜜の妖主が何を告げているのか、その内容を理解することはできていなかった。

だが、そんなことは絶対者である彼には関係がなかったのだろう。

金の光闇の化身は、さらに淡々と続けた。

『人間がどのような生き物かは知らぬが、生き延びたいのなら、捨てぬことだ。人間がいかなる未来を選ぶか……選べるかは、その骰子と生ける鞘の扱い次第と心に刻め』

それだけ告げると、王蜜の妖主たる青年は、それまでの圧倒的空気が嘘のようにその姿をか

き消した。

夢か幻か――どちらかだと断じて不思議のないその出来事を、アーヴィヌスが現実だと認識したのは、掌の中に残されていた黄玉のせいだった。

そして、あの訪いと言葉が現実のものであったのだと確信したのは、翌日ガンディアに派遣した、紅蓮姫奪還を命じた配下から届いた報告の内容ゆえ。

紅蓮姫を横領したまま浮城から逃亡した、元破妖剣士ラエスリールが、その紅蓮姫を身に抱え込んだまま、仮死状態となった――というものだった。

金の光闇の化身の言葉が脳裏を駆け巡る。

仕掛けられた詐術の可能性は、王蜜の妖主自ら現れたことからしても高いと思われた。

その口から告げられた言葉の数々も、罠と思えばいくらでも疑いようのあるものばかり。

騙されるか。

アーヴィヌスは必死に自分に言い聞かせ、自分の最善の決定を下そうと腐心した。

戯言だ。

あんな絶対的力の主が、わざわざ真実を自分の前に晒すわけがない。

そもそも人間にとって敵でしかない魔性の王が、人間の未来などに関心の欠片も抱いている

はずがないのだ。

だから、あの黄玉ももたらされた情報も、その言葉も――。

全てはだから、人間を翻弄するための空言に過ぎない。

そう……そのはずだ。

何度も何度も、アーヴィヌスはあの夜の夢とも現ともつかぬ、だが絶対的な記憶を繰り返しては煩悶した。

悩む理由はただのひとつだ。

絶対的な世界の主――人間など塵芥とも、草木とも、路傍の石とも……そのくせ太陽や星とも等しく見ていたあの眼差し。

そして、最初から最後まで、何ら感情の含まれぬ淡々とした口調で告げられた……あの内容は。

まるで、この先人間が滅びようが残ろうが、自分は知ったことではないが、生き延びたいならひとつぐらい手を貸してやってもいい……とでも言いたげな。

違う。

選ぶのはあくまで人間――すなわち自分に委ねられた。

真球の黄玉と、『生身の鞘』という言葉。
――生き残りたいなら、上手く使え。
そう、言われたのではなかったのか。
嘘か真実か。
滅びへの誘いか、真実救いの差し伸べられた一筋の糸か。
悩みに悩み、苦しみに苦しんで――アーヴィヌスは最後に『糸』であることに賭けた。
どれほど浮城の安定とそこに暮らす者たちの心の安寧を優先しようと考え、そのために働こうとも……心のどこかでは、彼も知っていた。
気づいていた。
世界は大いなるうねりのただ中に放り出されているのだということに。
そして――。
その決断を下してより二年弱。
あの夜感じた同じ黄金の光を瞼ごしに感じて目覚めたアーヴィヌスは。
覚醒と同時に、全身をぶるりと震わせた。
何が起こったのか、具体的に何かを知ったわけでも感じたわけでもない。

それでも——人間としての本能か直感が、彼に世界の真実を知らしめたのだ。

すなわち、世界は流れ出したのだ。

人間を含むあらゆる存在の有無を問いただしながら——同時にその是非を問いながら、世界は未知の流れを選び取ったのだ……！

2

虚空に浮かぶ真球の小城――未だ名もなきその城の居室で、雛の君と呼ばれる少女はくつり、と喉を鳴らした。

目前の巨大な鏡に、映し出される光景が、彼女に喜びを与えていた。

もう待てない――気に入りの女性の不調に、焦りが大きく育っていたところだけに、鏡の中の現実が嬉しい。

未だ早いという懸念を圧して、用意した大舞台――彼女が選んだ雛鳥は、何とか務めを果たしてくれそうに見えた。

失う駒が惜しくないと言えば嘘になるが、他よりは格段に成功する確率が高いことを思えば、惜しむのは愚かなことだ。

自分の望みを引き寄せるために、何も手放さずにすめばこれに越したことはないのだろうが、

いかんせん今回ばかりはそれは叶わぬことだ。
どうあっても、駒のひとつは失われる。
ならば、せめて最大限に駒は活用すべきだろう——そう、ふたつとも。
「もうすぐ、ね」
もうすぐ自分の願いはかなう。
望むものが生まれ、この手に落ちてくる。
「もうすぐ、こんな不快な空気などない場所へ連れて行ってあげるわ、緋陵姫（ひりょうき）」
そこでなら、あなたを苦しめる不調もきっと消えるはず……。
床に伏せたままの女性を思いながら、彼女はじっとその時を待った。
もう少し——本当にもう少しだけ。
そうしたら。
世界は生まれ変わるのだ——。

※

璃岩城――。

十万ものヒトガタが壁面を覆う広大な空間で、アーゼンターラはぎりぎりと唇を噛みしめていた。

大切な妖貴の少女の姿は、彼女の前に立つ紫紺の髪を持つ青年の背中のせいで目にすることができない。

駆け寄って、少女を助けたいのに、指一本として動かない我が身が口惜しい。

紫紺の妖主――藍絲が放った強大な妖気に、自分を含む浮城の住人全員が床に縫いつけられているのだ。

必死に身を起こそうとするけれど、肘を胸元に引き寄せることさえ難しい……その間にも、青年は優雅な仕種で、蜜里に手を伸ばそうとしているというのに！

蜜里から、あの黄玉の魔具を奪い取るために。

思い出す――魔具の放った金色の光。あれが空間を包みこんだ瞬間、妖主の揮った力によって傷ついた体は完全に癒えた。捻り折られた足には痛みすらなく、まさに切り落とされようとしていた右手から、巻きついていた紫紺の糸は消えていた。

妖主の繰り出した力をも覆す恐るべき力を、あの魔具は放ったのだ。

恐らく――至高の存在のひとりである紫紺の妖主にとっても、それは予想外の出来事だったのだろう。そして、彼は魔具を看過できぬと判断したのだ。

「渡しなさい、幼い同胞。それは王蜜の妖主が手がけた品、人間の世にあっていいものではないよ」

耳にするだけで、陶然たる心地になるような、美しすぎる声が優しく響く。

脅す響きは感じられない。

蜜里を案じているかのようにさえ、聞こえる声だ。

「さあ」

促す声にも、怯えを誘うものはない。

だが、蜜里は頷かない――見えなくても、わかる。

蜜里は絶対にあの魔具を紫紺の妖主に差し出しはしないだろう――あの力を知るがゆえに。

そして、それすら奪われたら自分たちに勝機はないと確信するがゆえに。

事実、アーゼンターラ自身どう声をかけていいのかわからなかった。

渡さねば、蜜里が妖主に酷い目に遭わされる――だが、渡したら自分たち全員の命運は尽きる――どちらを選んでも大差ない未来しか思い描けないから、どちらも選べない。

スラヴィエーラやマイダード、オルグァンが蜜里にかける声が聞こえる。
放すな、と。
その魔具なくして勝機はない、と。
それはこの場の状況を冷静に判断した上での、蜜里に負担をかけることを承知の上で絞り出された彼らの判断だ。
そう……それは正しい。
あまりにも強大な紫紺の妖主の力の前に、自分たちは——三振りの破妖刀があってさえ——徒手も同然だ。
魔具を奪われてしまえば、最早打つ手はない。
ああ、だけど……！
このままでは蜜里が無事にすまない——抵抗すれば、きっと妖主は彼女に力を揮うだろう……妖気だけで自分たちを難なく押さえつけるあの魔王が、彼女に力を行使したら、いったいどうなるというのか。
幼い同胞——と、彼は蜜里に呼びかけた。
だが、それだけの理由で、彼が手控えるとは思えない。魔性同士であっても、瑣末なことで

争うことは珍しくないと聞く。だとしたら、魔王が生まれて間もない幼い妖貴を対等に扱うはずがない——説得がうまくいかなければ、即座に力にものを言わせることだろう。

駄目だ、それは駄目だ。

けれど、だとしたら、一体自分に何ができるのか——指一本自由に動かせないこの状況で、これほどの無力を思い知らされたこの場で。

ぎり、と再度アーゼンターラは唇を噛みしめた。

おかしなものだ。

全身自由にならないというのに、なぜ口の自由は奪われないのだろう。

それは自分に限らず、スラヴィエーラたちも同じはずだ。これほどの圧力に押しつぶされながら、それでも彼らは蜜里に声を送れたのだから。

会話を交わす自由だけを、妖主たる青年は自分たちに許しているということだろうか——単なる妖気だけで、そこまで自在に力の加減ができるというのなら、彼が本気を出したとすれば、それはどれほどのものとなるだろう。

ぞっとする考えに、動かないはずの右手の指先が震えたような気がした。

最早すでに、それは恐怖などという感情を通り越した戦慄だった。

この世界には、これほどの力持つ者が存在するのだ。存在そのものへか力へか……どちらへともつかぬ畏れが胸を覆い尽くす。

勝てる勝てないの問題ではない。

これはすでに人間が敵に対して覚える感情ではない。

絶対主――神に向ける思いに似ている。

そして、誰も神に勝とうとは……いや、勝負を挑もうとさえ考えはしない。圧倒的差異を前に、そんな思いは生まれる前に摘み取られてしまう。

では、これは――自分たちがいま、地に縫いつけられ、かけらの自由も与えられぬ青年の姿を取った存在は、神に準ずる者なのだろうか。だとしたら、自分たちには最初から勝機はなく、カーヴィアの十万の民の命は最初から潰える運命だった、と……？

そんなことは認められない――認めたくない。

だが、幼い蜜里ひとりを紫紺の妖主に対峙させ、なにひとつできずにいる自分のこの醜態は――これほど必死に動けと念じたことはない。

立ち上がり、駆けだし、蜜里を紫紺の妖主から解放するために、全身に動けと命じているにもかかわらず……ぴくりとも動かぬ四肢。

いいえ、とアーゼンターラは自身の弱気を叱咤した。

認めない、そんなこと。

仕方なかったのだ、と——他の誰が納得しても、できない自分がいることを知っている。

何もできなかった……五年近く前の夜。

その悔いは今も心を苛んでいる。

村を灼かれ、弟を奪われ、自分から逃げた結果がこれだ。同じことは二度と繰り返さない——自分の無力を理由に、見切りをつけ諦めることだけは！

動け、動け、動け、動け、動け！

全身の細胞ひとつひとつに、アーゼンターラは命じるように念じた。

僅かな自由が、何を引き出せるのかはわからない。だが、怯んで歩みを止めてしまっては、決して先には進めないことだけはわかっていた。

動け、動け、動け！

その思いに、右手が応えた。

指先だけだが、ほんの少しだけ漆黒の石床から持ち上がる感覚があったのだ。

動いた——!?

一瞬心に湧いた歓喜は、しかし次の瞬間、そちらに目を向けたことで違う現実をつきつけてきた。

動いたのは、自分の指ではなかった。

紫紺の妖主の圧倒的力の支配下にあって、小刻みに震え……今もそれを大きくしようとしているのは。

紅蓮姫！

真紅の刀身をさらに紅く染め上げて、紅蓮姫が震えていた。

蜜里がそばで『通訳』してくれない今、破妖刀がいかなる根拠でこれだけの力を発揮しているのかは不明だが、それはアーゼンターラにとっては幸いにも思えた。

もしもその声を聞くことができて、その内容が「美味しそう、美味しそう、ああ、食べたくて仕方ない！」だったりしたら、やはり少しばかりはがっくりきたと思うからだ。

それでも——この絶対的重力の場にあって、それでも動きを完全には封じられない破妖刀の存在はアーゼンターラには力強い援護となった。

諦めない。

仕方なかった。どうしようもなかった。何もできなかった。

言い訳しか口にできない未来なんて要らない。

言い訳など要らない未来こそが欲しい――そのために、頑張る今を……それが可能なことを、紅蓮姫が教えてくれたのだ。

そうよ、あたしは諦めない。

紅蓮姫を握る手に力をこめながら、彼女は蜜里に叫んだ。

「渡してしまいなさい、蜜里！」

それは勝機を手放すことを意味する言葉。

「いくら貴重でも強くてもっ！　蜜里には代えられない！　渡してしまうのよ！」

この言葉は、どれほど愚かに響くだろう――。

唯一の勝機の鍵を、身内の安全のためだけに放棄しろ――そう言っているに等しい言葉だという自覚はある。

自らを含め、複数いる仲間ではなく、ただ一人の少女の安全だけを選んだ身勝手な選択だ、と。

見なさば見なせ！

アーゼンターラは思った。

寧ろ、そう思え！

と。

見つめる先には、紫紺の髪の妖主の背中――。

そして、右の指に意識を集中してみれば、はっきりとわかった。紅蓮姫の震えが大きくなり、指の自由も少しだけ戻っていた。

おそらく、紫紺の妖主の自分に対する警戒心がほんの僅かに緩んだのだ。

それが自分と紅蓮姫の自由に繋がっている！

だが、まだ足りない――まだ、目的を果たすほどの右腕の自由は戻らない。

もう少し――もう少しだけなのに！

彼女がそう思った瞬間のことだった……その空間に、何か硬いモノが砕かれる音が響き渡ったのは。

それが何か、アーゼンターラにもわからなかった。

だが、彼女はその音を聴いたと思った刹那、反射的に蜜里を見た。

紫紺の妖主の背中に隠れて、見ることのかなわぬ魔性の友人を。

その姿は変わらず見えない――だが、それでも……それなのに。

アーゼンターラには、その時蜜里の顔が見えたような気がしたのだ。
泣きそうな顔をして、それでも嬉しそうに笑いながら——黄玉の魔具を噛み砕く少女の姿が……はっきりと見えたような気がした。
そうして……蜜里が噛み砕いた魔具から、優しい金色の光が解き放たれ、いずこかへと戻っていくのが……やはり視えた。
それと同時に、訪れた好機もまた、アーゼンターラは見逃しはしなかった。
魔具の最後の力か、束縛の力が弱まった。
触れる紅蓮姫はまさに今にも飛び出さんばかりの勢い。
今しかない。
アーゼンターラは渾身の力を振り絞り、紅蓮姫を紫紺の妖主の背中を目がけて投げつけた！
上級魔性の命が何より好きな破妖刀のことだ——あとは勝手に心臓のひとつを目がけて跳んでいってくれるはずだ。
アーゼンターラの予想は裏切られることなく、紅蓮姫は違わず妖主の背後からその心臓のひとつを貫いた。
そして。

その衝撃からか、その場を支配する絶対的な重力が消える。
アーゼンターラは迷わなかった。
即座に立ち上がると同時に、必死に紫紺の妖主目がけて駆け出した！
そして、摑む――紅蓮姫の柄を！
捻りこむ！
背後からとか、隙を衝いてなどという言葉は脳裏にも浮かばなかった。
退くわけにはいかない戦いの場に於いて、おそらく唯一の好機が訪れたのだ。
逃がすなど愚の骨頂、全身全霊をこめて、アーゼンターラは勝利をもぎ取るためだけに、行動した。

※

藍絲は――背後から心臓のひとつを紅蓮姫に刺し貫かれ、そこに宿る命の悉くを貪欲な破妖刀に喰われる感覚に見舞われながら、それでも……それ以上の満足感を味わっていた。
世界を支える五要――五つの柱、あるいは要石に数えられる彼にとって、世界はそれなりに

面白いものだった……ずっと、長い間。

人間は寿命も短く脆い命しか持たないくせに、強靭な繁殖力であっという間に世界中に広がったことでも驚かせてくれたというのに、それだけでなく自分……否、自分たちを楽しませ、喜ばせる要素をふんだんに抱え持っていた。

憎悪、妬みといった負の感情を、そのちっぽけな体には到底収まりきれないほどに育て上げ、他者に広げるかと思えば、その一方で自らが瀕死の状態であろうと他者の命を迷わず選び、掬い上げることもある。

人間の一番面白い部分は、彼らが清濁の属性に分かれていないということだ。

清い部分が大部分を占める人間も逆のそれもいる。

だが、大半の人間というモノは清濁を大抵半々に持ち合わせているものだ。

そうして均衡を保ちながら、時に崩しながら、身丈にあった善行や悪行を積み重ね、最期を迎える。

面白いのは、ごく一部だが、こちらが思いもしない一面を見せる存在が時々現れることだ。

清いばかりで面白みがないと思った人間が、突然ひとつのきっかけで逆の立場に塗り変わる。

聖君と誉れ高かった老王が、たったひとりの少女に出会ったがために道を誤ったことがある。

また、生まれて以来悪行しか知らぬとしか思えなかった男が、最期の最期、自分より幼子の命を選んで冥府に下ったこともある。

人間全てが彼らの興味を引くわけではない。

だが、自分たちの想像すら時に容易く裏切る言動を取る人間という存在を、藍絲は常に興味深く見つめてきており、自分たちと同じ世界にそうした存在があるということを、それなりに楽しんで生きてきたのだ。

まあ、時折自分の期待とは違う予想外の動きをしてくれて、痛手や恥をかかせてくれることもあり、そうした時だけはさすがに単純に面白がってばかりはいられないのだが。

だが、それらも含めて、藍絲はこの世界と人間のことを面白く好ましく思っている。

人間は、自分たちが好ましく思う意味でも逆の意味でも、時々ではあるが期待を裏切るという意味で常に興味深い存在で在り続けてきた。

そう……だから、今のこの状況にも、藍絲は興味深さを抱きはしても、自らを揺るがすような感情の激震を覚えはしなかった。

自分たちに残された最後の鍵となる可能性を秘めた存在――黄玉の檻に封じられた魂を解放することに気を取られていたことは認める。

絶対的力で以て、縫い止めていたはずの人間たちへの関心が薄れていたことも認めよう。

かつて、自分の命を心臓ひとつ分まるごと喰らってくれた破妖刀がこの場にあることを、忘れたわけでもなかったが、そちらへの警戒を怠っていたことを、怠惰だと言われてしまえば確かにその通りだ。

だが、それら全てを合わせても、この事態は藍絲にとって興味深い事態以上の意味を持つものではなかったのだ。

雛の君に選ばれた時から、この程度のことは覚悟していた。

いや、彼女の狙いがそれ以上であることは感知していたから、最低限の負担として想定していたのだ……心臓ひとつに宿る命全てを捨てることになるだろうとは。

だが、そうはなるまいとも思っていた。

第六の妖主が育て、この地へ差し向けた雛鳥は、その力不足を補うための連れともども、あまりに未熟に過ぎたのだ。

皮膚一枚傷つけられるとは思えなかった。

だからと言って、雛の君が選んだ雛鳥を完全に叩き潰すわけにもいかない。換えのない存在である以上、生かして浮城に戻さなければならない——再度の挑戦を彼女にさせるために。

しかし、それが存外難しい。
どう事態を収めれば、妖主たる自分に挑みながら、命を拾って浮城に生還させられるのか……そうした雑事に心が奪われていたことは確かだ。
だが――。
たとえそうだとしても、心臓ひとつ分の命を根こそぎ破妖刀に馳走することになったこの事態には納得はしても、だ！
断じて、それ以上を認める気はない。
それが、破妖刀やその使い手によるものでないとすればなおさらのことだ。
「雛の君！」
非難を込めて、藍絲は叫んだ。
感じる――自分の命が、自分の意志を無視して、紅蓮姫が刺し貫いた心臓目がけて押し寄せてくる！
罠は承知――雛の君が自分を新たな世界のための贄に選んだことなどわかりきっていた。
だが、それでも両者には無言の約束があった。
少なくとも、藍絲はそう受け取っていた。

この役目を六番目に生まれた少女に振り分けられた時点で、自らの命は彼女が築く新たな世界のための礎となるのだと……されるのだと。

それでも受け入れたのは、それを自分が引き受けなければ、その役目が最愛の女性に振り当てられることがわかりきっていたからだ。

生真面目で潔癖で誇り高い最愛の女性――。

純白の焔をそのまま姿に変えたような白焔の妖主。

彼女をこんな下らない茶番に巻き込むなど許せなかった。

だから、応じる声に従った――猶予はあると両者ともに認めていたからだ。

だが……それは、自分の誤認だったようだ。

雛の君は悠長に、彼女に必要な鍵となる雛鳥を育てる気などなかったのだから！

くすくす、くすくすと。

笑う漆黒の少女の声が脳裏に響く。

「ごめんなさい、四の君」

事情が変わってしまったの。

悪びれることなく、少女の声は軽やかに響く。

紅蓮姫に貫かれた心臓に、彼の他の部分に宿った命を悉く送り続けながら――すなわち藍絲の命を確実に葬りながら。

漆黒の雛は、残酷に笑って告げた。

「わたしが求める鍵のために、どうか礎となってくださいましね」

「雛の君いいっ！」

恨みとも辛みともつかない叫び。

それが紫紺の妖主藍絲がアーゼンターラたちに残した最期の声だった――。

3

ぽとり、ぽとり、と水音が聞こえる。
ぽとり、ぽとり。
ぽとり、ぽとり。
傾(かたむ)けられた水差しの口から、水が滴(したた)り落ちていく。
水は命。
水差しは生身の自分。
影という受け皿を勝手に用意され、自分自身を勝手に傾けられて——削(けず)られていく自分の命の水音を、リメラトーンはただ聞くことしかできなかった。
何を理由としてか、ある日突然雛(ひな)の君(きみ)から紫紺(しこん)の妖主(ようしゅ)にその身を下され、その直後人形とするために影を奪われた。

その日以来、こぼれ落ちる水音が、耳から離れることがない。
ぽとり、ぽとり、ぽとり、ぽとり。
一滴ずつ、自分の命が用意された人形に滴り落ちて移っていく。
最初はゆっくりしたものに思えた水音――それが、こんなにも早くこの身を蝕み、自由を奪うとは思ってもいなかった。
ぽとり、ぽとり。
一滴ずつ、流れ落ちていく命――それと同時に確実に弱っていくこの体。
止まらない流れ、止められないその力。
ああ、駄目だと思った。
自分には変えられない。止められない。影に全てを奪われる流れを。
では、どうなるのか。
不可避の未来は、明らかだった。
ああ、自分は自分でなくなるのだ。
紫紺の妖主の望むまま、この身は彼の傀儡に変わり果てるのだ。
それしか道はないのだと、水音を聞く度に思い知らされた。

傀儡になってしまった自分はどうなるのかと思った時、他者に心まで支配される事態を想像し、心底から恐ろしくなった。

あの運命の夜からの、これまでの自分を振り返った時、そうしてそのことで年子の姉を憎み責めることで心を守ってきた自覚があったから、なおさら恐ろしかった。

彼女を責めることで、リメラトーンは自分の無力を棚上げしてきた。

彼女のわがままのせいで、村を襲った炎を防げなかったのだと。彼女の身勝手な望みのせいで、あの夜村を離れてしまったのだ、と。

本当はわかっていたのに。

あの圧倒的な魔性の力——村を灼き尽くした灼熱の炎。

あんなものを、自分とアーゼンターラ——たったふたりの子供に防ぐことも、収めることもできるはずがなかったのだ。

それでも苦しみと悲しみは大きすぎて、村を襲った魔性である芝牙尖に命を救われた後、無事だと知った姉を責めずにはいられなかった。

強大な魔性に目をつけられ狙われたのは、何も彼女のせいではなかったのに。

彼女こそが一番の被害者であったのに。

わかっていても、ずっとそのことを認められなかった。彼女を責め、憎むことでしか自分を支えることができなかった。

それは誰のせいでもない、自分自身の弱さが生み出したことだ。

心の奥底で、そんなことはずっとわかっていた。

ただ、認めたくなくてひとつでも年長の姉のせいにすることで、彼女に甘えていただけだ。

けれど――。

ぽたり、ぽたり。

滴り落ちる命――紫紺の妖主の手の中に、刻一刻と落ちていく自分。

このまま、完全にこの命がかの魔王の手に落ちてしまったら――彼の傀儡と化してしまったら、この身は彼女に何をするのだろう？

自分の抱え込んだ狡さを、人形となった自分は覚えていられるだろうか。

傀儡師の都合で、そんな思いはそぎ落とされてしまうのだろうか。

そうして、あの夜の痛みや苦しみまで、他者に支配されることで、アーゼンターラを効果的に傷つけるだけの道具に成りはててしまうのか。

駄目だ、と思った。

それだけは、駄目だと。

幼く愚かであったのは、自分たちふたりとも、同じだった。

救い手が異なったせいで、立場と道は違えてしまったけれど、それは決してどちらかに責があってのことではない。

そうして、ふたりとも同じくらいに弱かった。

自分はアーゼンターラを恨まずにはいられず、彼女は自らを責めるあまり、記憶を書き換えてしまった。

互いの弱さが、互いを強く縛りつけてしまった。

……そこを、魔性につけ込まれたのだ。

彼女を憎み責め、追い詰めることで、芝牙尖は——いや、彼の主は、彼女を我が手に落とそうとした。

それがうまくいかなかった理由が何かはわからない。

だが、それから間もなく、自分の身は芝牙尖の主の手から離れ、紫紺の妖主の手に渡された……戯れの人形の材料にでも、という名目で。

事実、紫紺の妖主は自分の命を容赦なく搾り取るべく完璧な器を用意した。

ぽとり、ぽとり。

確実に滴り落ちる命と――意志。

……悟らざるを得なかった。

このままでは、自分は紫紺の妖主の傀儡となってしまう。

薄々認めている自分の本音も甘えも何もかも、アーゼンターラに伝えることのないまま――それが自分の真実だと、彼女に思わせたまま。

あるいはその焦りすらも、強大にして狡猾な魔性の思惑だったのかもしれない。

そうではないと、本当は違うのだと、自分が彼女に慌てて真意を伝えることさえ――いや、仮定ではない。彼らは確かに、自分の奥底に眠っていた本当の本音すらも利用した。

勝機など皆無の舞台に、彼女を引きずり出すために。

いつだって、自分は後手に回ってきた。

よかれと思って彼女の夢を訪れたことさえ、結果的に彼女をこの場に引きずり出すきっかけにされてしまった。

先ほどのことにしてもそうだ。

この城に、アーゼンターラたちが来たと知った時、最早自由に動かぬ体を圧して、彼女に会

いに行った。

止めろよ、止めろ。止めてくれ。

言いたいことは、ただそれだけ。けれど、紫紺の妖主は彼女たちが止まれない理由を自分以外にも作っており、しゃにむにそう言うだけでは止められないとわかっていた。

けれど、どうしても止めたくて。

逃げろ、と言った。

自分もカーヴィアの十万の民の命も、見捨てて逃げろと。

みっともなくても、後に悪評が立とうとも、ここにある命を守るために——他者より自分の命を優先することは非難されるようなことではないのだから、と。

もっとも。

一蹴されることは、言いながらわかっていたような気もするけれど。

果たして彼女は彼の言葉を聞かなかったふりをした。

そして、紫紺の妖主が待つ広間へと足を進めたのだ。

絶望的な戦いへと。

『待っていて』

なんて、ふたりとも信じていない言葉を残して。
否、一縷の望みを彼女は信じていたかもしれない。
だが、リメラトーンはそこにどんな希望も見いだしてはいなかった。なぜなら彼は、その蜘蛛の糸のような奇跡が生じた後にこそ、彼女を襲う絶望を知っていた。
だから……。
もう、本当に自分の望みがなんであるか、彼にはわからなくなっていたのだ。
滴り落ちる命が尽きるまで、その音が止まないことか——あるいはその音が止むことか……それすらも。
けれど、その音が止むことはないのだと、どこかで信じていたのかもしれない。
相手は世界を担う魔性の王だ。
打ち倒すことなど、人間にできることではない。
アーゼンターラは紫紺の妖主の力の前に敗れるだろう。
そこで命が尽きようと、それは芝牙尖から聞かされた未来よりは遙かにましな結末で、だからリメラトーンは自分がそれを望んでいるのだと思っていた。
ぽとり、ぽとり。

今も変わらず聞こえる水音。
それこそが、自分の信じる未来だと。
だが――。
不意に、その音が、途切れた。
命の流れが、突然断ち切られ、逆流してくる！
そう――影を介在に、流れ出す一方だった自分の命と力の全てが、一気にこの身に戻って来たのだ！
それは。
その意味するところは？
まさかと思った。あり得ない、と。
だが、他にこの現象に理由をつけられはしない。
「勝った、のか……？　まさか、紫紺の妖主に……？」
呆然と、リメラトーンは呟いた。
「でも……じゃあ、それじゃ……！」
命が救われた安堵より、アーゼンターラが勝ち取った勝利より――この時彼の脳裏を支配し

たのは、底抜けの恐怖だった。
「芝牙尖！」
思わず呼びかけたのは、傍にいるはずの漆黒の魔性の名だった。
だが――。
リメラトーンの呼びかけに応える声はなかった。
先ほどまで確かにそばにいたはずの漆黒の青年の姿は、室内から消え失せていたのである。

※

そのとき――その瞬間。
場を圧倒的且つ絶対的空気で支配したのは、完全なる静寂だった。
世界も空間も残らず凍りつく――あらゆる因子が振動を封じられる。
何物も震えることさえ許されぬ。
絶対の静寂――絶対の静止。
ほんの一瞬――一瞬だけ。

動き続けることが約束された世界に、そんな時間とも呼べぬ刹那が出現した。
アーゼンターラは自らの両手を見つめていた。
じぶんが摑んでいるものが、確かにそこにあるのだと……わけもなく確認するように。
それは確かに彼女の手の中に在った。
真紅の刀身を持つ破妖刀——紅蓮姫の柄を、彼女はしっかりと握りしめていた。
それが、彼女にこれが現実なのだと認識させる。
そうだ——自分は、一度彼女を宙に放った……紫紺の妖主の命を奪うために。
狙い違わず、彼女は妖主の心臓を貫き、一瞬緩んだ全身の束縛に、彼女は立ち上がり、紅蓮姫のもとへ駆けつけたのだ。
妖主の手で引き抜かれることのないよう——充分な命を紅蓮姫が喰らわぬうちに心臓から遠ざけられぬように。
無我夢中だった。
駆け寄った後は、引き抜かれぬよう必死に抉る刃に力を込めた。
真紅の刀身を持つ破妖刀が歓喜の声を上げるのを、初めて聞いたような気がした。
護り手である蜜里経由でなく、初めて「美味しい！」と叫ぶ少女の声——紅蓮姫のそれを

……聞いたような気がした。

だが、それを含めても、その時、その場の印象を語るとすれば、絶対的な静寂――それ以外にはないと思えた。

いや、音だけではない――その空間から消えた……否、その場を支配する空白ゆえに取り除かれた要素は。

音も、光も、色も、闇さえも。

何もない――本当に、なにもない空間が、そこには広がっていたのだ。

ふわり、と手のなかの力が消えた。

紅蓮姫が貫いていたはずの、青年の体が消失したのだ。

そして、その直後――。

ことん、と小さな……本当に小さな何かが、床に落ちる音がした。

何の音かと、ゆっくりとそちらに目を向けたアーゼンターラは、塵ひとつない漆黒の石床の上に、小石のようなものが転がっているのを認めた。

ことん、と音を立ててふたつめのそれが床に落ちた。

何が――どこから？

顔を上げた彼女は、十万ものヒトガタが一斉にその姿を崩すのを見た。
ひび割れ、欠片が次々に剝がれ落ちる。
小石のように見えたのは、完成することのなかったヒトガタの欠片だったのだ。
脳裏に、先日の浮城でのやりとりが甦った。
夢に出て来たリメラトーンのことを教えてもらうために訪ねたリーヴシェランの部屋でのことだ。
影糸術――。
破るには術者を倒すしかない、と金髪の魅縛師の少女が言っていた。
邪羅はおそらく術と結びつけた命を散らせばすむだろうと言っていた。
では、これはどちらなのだろう?
消えた紫紺の妖主――壊れていくヒトガタ。
遠くで、耳に馴染んだ少女の声が聞こえた。
実際の距離ではなく、そんな風に聞こえたのだ。
「魂が、戻っていく……」
黒髪黒瞳の少女には、不可視の人間の魂も視えるのだろう。

「……戻って、いく……？」
どこへ？
決まっている。本来の肉体があるカーヴィアへ、だ。
だとしたら——自分は。
呆然と、アーゼンターラは呟いた——実感など覚えぬままに。
「あたし……やったの？」
紫紺の妖主を倒せたかどうかはわからない。
けれど、十万のヒトガタが崩れたということは——彼らの魂が還っていくというのなら。
トーン——リメラトーン。
弟の命も含めて、今度こそ自分は間に合ったと考えていいのだろうか⁉
「ターラ！」
どん、と左腕に小さな体がぶつかってくるのを感じる。
涙を持たぬはずの漆黒の少女が、潤んだ目で見上げていた。
「ターラ！　ターラ！　よかった！　ターラ、無事で！」
幼い子供のように、自分の名と「よかった」を繰り返す蜜里の姿に、じわじわと現実が胸に

染みこんでくる。

「蜜里」

その名を呼び、自分より小さな体を抱き返そうとして、アーゼンターラは自分の右手の紅蓮姫が未だ抜き身のままであることを思い出し、ぎょっとした。

「蜜里！　駄目！　退いてっっ！　紅蓮姫がまだ……！」

剝き出しなのよーっっ！

必死さの滲むその叫びは、彼女同様呆然としていた年長者三人の意識をも現実に引き戻し……そうして、次の瞬間、広間は爆笑に包まれたのである。

第三十二章　震える玻璃

1

その空間に、見慣れた父の居城を見つけた時、邪羅は呆然とすらした。

「ほんとに、ある……」

この目で見ても、俄には信じられなかった——なぜなら、それは紫紺の妖主自らの手によって、隠され移動していたはずだったからだ。

目覚めたラエスリールに、璃岩城に連れて行ってほしいと言われた時、即座に頷けなかったのは、邪羅自身が璃岩城の現在の位置を把握できていなかったせいもあった。

母である白焔の妖主にとことん甘く——そのくせ過去、彼女を手に入れるために用いた策は卑怯で卑劣で小狡いとしか言いようのないものだったが——なぜか間抜けな一面を、他の妖主より格段に持っている父のことを、実のところ邪羅は、妖主としての実力に欠け……まではしないにしても、その格はあまり高くないのではないかと思っていた。

紅蓮姫を揮うラエスリールに後れを取ったのは、母である白煉も同じだが、やはりその時の状況が違いすぎて、そう感じてしまうのだ。

人間と違い、首を落とされたところで命に支障がないというのは……まあ、いい。それでも首に集っていた命は根こそぎ紅蓮姫に喰われたようだが……心臓ひとつ分の命をかの破妖刀に奪われたのは母も同じだ。

だから、そこはまあ容認するとしても、だ。

やはり、落とされた首を両手で持つという、間抜けな姿だけは、強大にして誇り高い妖主としての在り方から大幅に外れたものだと思うのだ。

あれを見たせいで、邪羅はどこかで「父ちゃんは間抜け」と思い込んでいたように思う。しかも人形作りが特技というあたりで、少々引いてしまってもいた。

真面目な人形師を馬鹿にするつもりはないが、何というか……父の人形作りは、母やその配下から聞いた話では、気まぐれ、思いつきに因るところが大きいということだったので、あまり尊敬に値するとは思えなかったのだ。

そのため、邪羅の父への印象は「間抜けで気まぐれで傍迷惑」という思いが強く、それだけではあり得ない部分に関しては目が行っていなかった。

だが、今回の件で、彼はこれまで見ようとしなかった——あるいはあえて見せられていなかった父の力と姿というものの一端を垣間見た。

突然行方を眩ませた両親は、邪羅がどれほど捜しても手がかりひとつ見つけられぬほど完璧にその気配を隠した。

さらに圧巻だったのは、配下を全て遠ざけた上で、璃岩城をもどこかへ隠しきった父のその力だった。

長年そこに集い、その気配を指先までも馴染ませた古なじみの配下の誰ひとりとして、隠された城を見つけ出すことが出来ない——彼らの記憶に干渉することも、捜す努力を阻むこともなく、それでいて、難なく藍絲は璃岩城を彼らから隠しきった。

それは、それまで抱いていた、どこか間の抜けた父からは想像もつかない力だった。

邪羅は、自分の父が紛れもなく、世界中の魔性の王のひとりであることを、その時初めて痛感したのだ。

それと同時に、カーヴィアの件に関する父の本気を知った。

何があったのか、邪羅には父も母も教えてはくれなかった。

第六の存在が何なのか、それすらも教えられていない。

そう……訊けば教える。

訊かねば、自分では答えを見いだすこともできない若輩者として、ずっと扱われていたことを初めて自覚した。

そして、だからこそ、肝心なことは告げられることはなかったのだ、と。

ふざけるな、と叫びたかった。

妖主にしかわからぬ何かがあり、妖主にしか動かせぬ何かがあるのだろうとは思う。

そこに事情も知らぬ若輩が首を突っ込んだところで、邪魔にしかならないと判断されたとしても、それは無理からぬことだとは思う……少なくとも、理性では。

だが、感情は全然違うことを感じるのだ。

肌で感じる——今、起こっていることは、世界全体に係わるなにか、だと。

ガンダル・アルスに息づく全ての命にとって無関係ではない何かが動き出しているのだ。

それを。

若輩者だからとか、経験不足だからとか、無力だからとか、役者不足だから……とか！

そんな理由で遠ざけられるのは我慢できない！

だが——そうは思っても、邪羅にできることは本当に限られていて。

両親が何を考え、どこへ向かおうとしているのかもわからない。
確信できるのは、大きなうねりが世界を呑み込もうとしていることだけだ。
それがどんな形で、どんな結果をもたらすのかも何もわからない。
だが。
やはり邪羅は「ふざけるな！」と叫びたいのだ。
上の者だけで、勝手に決めるな、と。
そんな風に思いながら、だが何もできぬまま、ジレンマに苛まれている時に、あの声は聞こえたのだ。
『邪羅』
と――。
懐かしくも愛しい女性の声が。
仮初めの器ではない、真実彼女以外の何者でもない彼女の喉から呼ばれた自分の名。
すぐさま跳んでいった。
浮城の最奥近い空間で、後に問題になるかもしれないことなど――ちらっとは脳裏に過ったが、瑣末なことだと切り捨てて、跳んだ。

大切なひと。
自分を見つけてくれたひと。
母に真名を呼ばれたことで、魔性としての自分を確立できぬ状態で、母の支配下に置かれた自分を呼び戻し、魔性であろうが人間であろうが、揺るがぬ根源を邪羅に築かせてくれた唯一のひと。
邪羅は誰かに仕えようとは思わない。
誰かに命をかけた忠誠を誓うこともないと思う。
だが、そうした意味ではなく——無条件に、永遠に、好意を抱き続けるに違いないと思う相手が、ただひとりだけ、いる。
金髪の魅縛師の少女に対して覚える感情とは全く違う、自分でもこの想いのために、自分がどこまでできるのかはわからない。
だが、そのわからなさこそが、恐らく一番自分にとって恐ろしい部分なのだろうとはわかっている。
必ず応えるとは約束できない。
その時の気分次第で、どこまでやるか、選び取る。

その自由をくれたのは、間違いなく彼女なのだから、きっと彼女は文句は言わない……それどころか、望みすら満足に口にしてくれないかもしれない。

それはそれで、苛立ちを覚えないでもない反応なのだが。

けれど——呼ばれて矢も楯もたまらず跳んで行ったそこで。

そのひとは、真っ直ぐに全てを貫く眼差しで、強い、強い望みを口にした。

自分を璃岩城へ連れていってほしいのだ、と。

何があっても叶えてあげたい——そう思わせる眼差しと口調で、しかし告げられた彼女の望みはその時の邪羅にはかなわぬものだった。

無理だよ、姉ちゃん。だって、おれ。

いま、璃岩城がどこにあるか知らないんだから！

恥を覚悟で告白した彼に、彼女——ラエスリールは「大丈夫」だと言いきった。

場所ならわかる、と。

なぜなら、ほんの先ほどまで、自分はそこにいたのだから、と。

「だから、道筋は、わかる」

確信に満ちた断言に、邪羅は少しだけこれまでの自分の無駄に終わった努力とか努力とか努

力とかを悲しく思った。

言ってはなんだが、生まれてこの方、これほど必死になったことはないというぐらいに頑張っても、おおかたの方角さえ突き止めることができなかったのに――。

おれの努力ってなに？

拗ねて「じゃあ、おれ呼び出す必要なかったじゃん」と言ってしまったのは……まあ、甘え以外の何ものでもなかった。

だが、相手はとてつもない力を持ちながら、その自覚をかけらも持たない天然中の天然だった。

ラエスリールは大真面目に「それは違う」と答え、その理由を告げたのだ。

「わたしはその場所はわかる。来た道を戻るぐらいのことはさすがにできると思う。だが、邪羅。わたしは生身でそこには行けないんだ」

どう考えても、歩いていける場所ではないと思うんだ。

続けられた台詞に、邪羅は目眩を覚えた。

自分を含め、放り出された妖貴たちが必死になって……それこそ血眼になって捜している璃岩城の場所をあっさり突き止めておいて。

そのくせに!?

歩いていける場所ではなさそうだから連れていってくれ!?

姉ちゃん、それはいろいろな意味で大きく間違ってると思う！　おれ以外の誰に言っても、鼻で笑って「歩いていきなさい」と返されると思う！　誰だって、姉ちゃんなら歩いていけると確信すると思う！

ぐるぐる、ぐるぐる、いろいろな想いが邪羅の脳裏に交錯した。

だが、結局彼女の言葉に応じたのは、自分が彼女にとことん弱いことと……その言葉の真偽を確かめたいと思ったからだ。

わかった、と答え。

彼女を抱きしめた格好で——後々いろいろな意味で怖い——彼女の誘導する方向に移動したのだって、隠された璃岩城を見つけたいと思うのと同じぐらいの重みで、それが彼女の勘違いだと確認したかったのだ。

なぜなら——。

次々と姿を隠した両親を含む妖主たち。

彼らには彼らにしか分け合えない事情があるのは、言われなくてもさすがにわかる。

そんな彼らのただ中に、自分は入れず、ラエスリールだけが入り込めるというのなら。
その意味は――あまりにも明らかではないか。
彼らの事情に分け入れるだけの何かを、ラエスリールが持っているだなんて。
いつだって、傷だらけになって戦うひとだということを知っている。
自分のことはいつだってよそに放り出して、目の前の困っている人間や傷ついてる人間を優先して……そのひとたちのためなら、どれほど傷つくことも厭わない。
そんな人が。
自分たちを排除した「上」の事情に分け入ることを許されてしまったら――。
その先に待つのは。
恐ろしすぎて、邪羅は想像することさえできなかった。
自分の予想を早々に裏切って欲しくて、だから……邪羅はラエスリールの確信が裏切られることを心の奥底で願っていた。
わかると彼女が告げた璃岩城の場所。
それが違えば、彼女の力も、自分の感じる不安も一蹴できる。
アーゼンターラたちのことは、確かに心配だ。

死なずにすむ未来があるなら是非とも用意してやりたいぐらいには。
だが、ラエスリールはこれから斬り込んでいく。
刃と認識できる武器を持たずとも、飛び込んでいく彼女が視える。
だから、せめて——彼女の確信は、間違っているのだと。
璃岩城の位置を把握できないことでもって、知らしめたいと思っていたのだと、この段階に至って知った。
そう……彼女が間違っていなかったことを、自ら認めざるを得ないこの状況に追い詰められて、初めて。
必死になって捜しに捜した。
けれど、どうしても見つからなかった。
その、城が。
「璃岩城……嘘だろ？　何でだよ」
あれだけ見つけたいと思った時には見つからなかったのに、いっそ見つからないでほしいと思った瞬間見つかるだなんて。
「ひでぇ」

と、邪羅は洩らした。
それが世界の望むことであり流れなのだと。
従うことはできなかったが、感じることはあった。
……あったのだ。

※

かつて、いつのまにか招じ入れられていた魔性の王の城――。
璃岩城。
その威容を初めて目にしたラエスリールは、内心感嘆の息を洩らした。
その全体像を見る機会がなかったからか、あるいは目の前の問題で意識がいっぱいになっていたからか、かつて訪れた時にはわからなかったことが、今はわかる。
したたり溢れるような強大な妖気を放つ、美しい貴石で築かれた城は、強大な気の集う『場』であると同時に、その主の在り方を体現したかのような存在だった。
美しく誇り高く――ある意味、人間よりよほどに清い。

人間がその弱さゆえに狡さや嘘を鎧として身につけるのに対して、魔性の王はそんなものを必要としないのだ。

魔性は確かに狡く嘘も多い。

だが、彼らはそれらを自らを守る鎧として用いるのではない。

我が身を守るのは自らの力のみ——策謀も罠も、彼らにとっては玩具のひとつでしかない……まあ、だからこそタチが悪いとも言えるのだが。

「美しいな」

素直な感想を口にすると、隣にいた邪羅が気乗りしない様子で肩をすくめた。

「そっかー？　無駄にきらきらしてて、おれはあまり好みじゃないんだけど……どっちかって言うと、母ちゃんの城のほうがおれ好きだな。炎でできてるんだけど、母ちゃんの性格そのまますぱーっとしてる感じが……えーっと、竹を割ったような性格？　そんな感じが城全体に溢れてて、居心地いいんだよな」

その言葉に、以前対峙した白焔の妖主の姿を思い出し、ラエスリールは彼女の城も彼女そのもののような潔さに満ちた美しい城なのだろうと想像した。

だとしたら、主自らの手で砕かれた虚空城はどうだったのだろう。

深紅の、時の魔王を体現していたはずのあの城は？

そこまで考えて、ラエスリールはぶるぶると頭を振った。ちら、とその存在を思っただけで、ぐつぐつと煮えたぎるような怒りが胸に湧き上がってきたのだ。

あんな男のことはどうでもいい！　一番最後に回すと決めたんだ！

せめてもの意地だ。だが、それがあの男にとっての痛手になるのかどうかは甚だ疑わしく、そのことが尚さら腹立たしい。

彼女は無理矢理、意識を目前の璃岩城に向けた。

入り口が——見える。

大変立派で仰々しい大きな扉だ。

全面に散りばめられた紫水晶や菫青石、青玉が妖気を宿して本来以上の輝きを放っている。

存在を誇示している。

その意味は、ラエスリールにもさすがにわかる。

現在の自分は、璃岩城とその主にとっては邪魔者以外の何者でもないだろう。あの扉をくぐって城に入るということは、自分の存在を両者に明かすことにしかならない。邪魔、あるいは障害だと認識される可能性は限りなく高く、そうである以上、入った瞬間山ほどの排除要員に

囲まれるのは目に見えている。

いつものラエスリールであれば、それはそれで仕方ないと、正面からの突破を考えただろう……裏技や抜け道の利用は、彼女の性格と資質にそぐわない。

だが、今は好みをどうこう言っている場合ではないのだ。

あの城の奥で、今も浮城の人間が戦っている——少なからぬ自分との関与を遠因として。

アーゼンタール。

必死に助けを求めて声ならぬ声を張りあげていた銀髪の少女。

恐怖と不安に晒されながら、自分をも含む大切な人間全員の無事を祈っていた。

貪欲なまでの、全員で助かることへの望み。

それが安易な自己犠牲より、ずっと難しく貴い想いだと……あの後、誰か彼女に言ってくれるひとがいただろうか。

それが、とても気にかかる。

大切なひとのための——自分はどうなってもいいから、というのは実は容易い。経験も少ない子供なら尚さら飛びつきそうな思いだ。

だが、自分さえ犠牲になればというのは、本当は一番安易で狡い逃げ道なのだ。

残されるひとの心を、全然考えていない身勝手な結論は、譬え成ったとしても多くの人の心に傷を残す。

ラエスリールは、泣きながら激怒して頬をぶってきたサティンの顔を思い出す。

『ラス！　あなたってひとは何をどう考えてっっ！　こんっなにひとに心配かけるの⁉　あなたが死体同然の状態で浮城に戻って来たとき、わたしたちがどれだけ震え上がったと思ってるの⁉　死んだわけじゃないとわかってたって！　いつ目覚めるかもわからないあなたの姿に、どんだけ傷ついたか、怖い思いを味わったか……！　生きてる間にまた会えるだろうか、どうだろうって、心底怖かったんですからね！』

物凄いサティンの剣幕に、ラエスリールは逆らわなかった――逆らえなかった。

サティンもセスランもマンスラムもリーヴシェランも邪羅も。

自分にとっては確かに大切なひとたちで――だから、彼らのためにならないことはすまいと心に決めていた。彼らのためなら、どんなこともしようとも……思っていた。

けれど。

自分だけの想いで、自分だけの判断で、動くことは結局彼らの心を踏みにじるのと同じ行為なのだと、あのときはっきりと思い知らされた……心配をかけないように、気をつけるぐらい

の思いでは、全然足りなかったのだと。

だから——自分に届けたアーゼンターラの思いは間違っていない。

結果は彼女の望みに添うものではなかったが、その思いは絶対に間違っていない。

そのことを、もし彼女がまだ誰にも告げられていないのなら、あの夜関わった自分こそが言わなければならない。

もし、彼女がすでにその言葉を得ているとしても——やはり自分は彼女の傍に行かなければならない。

闇主によって封じられた、あの夜の記憶がある限り。

『この子供はあなたの雛型』

そう告げた異質な気配を纏う女性の言葉に、嘘偽りを感じなかったこの心がある限り。

何があろうと——絶対に。

そんな彼女の思いを、傍らにいる邪羅は汲み取ったのかもしれない。

心底げんなりと——全く以て気が進みません、と顔に大きく書いて、乳白色の髪の青年は、決して告げたくはなかったろう……唯一の答えを口にした。

「姉ちゃん、御免、力不足で……」

それは、堂々たる扉以外の進入路を見いだせないという告白だった。
「いや、充分だ」
短く答えて、ラエスリールは貴石が散りばめられた璃岩城の扉を真っ直ぐに見つめた。
来るなら正面から来い。
そう言われているような気がする。
そして、それは非常にしっくりと、彼女の質に合った。
「そうしよう」
頷いて、彼女は邪羅に、扉の正面に移動してくれるように頼んだ。
荘厳で神々しいまでの貴石が散りばめられた輝きに溢れる大きな扉。
自ら開くことはない。
開く意志あらば、自らの手で開け。
まるでそう言い放っているかのような扉の前に立ち、ラエスリールは迷いなく両手を扉に押し当てた。
開くために。
その先に進むために。

力は要らなかった。
その意志こそが、扉を開ける鍵であるかのように。
呆気ないほどに容易く。
扉は開いた。
そして、その先に待っていたのは――。
「げ」
堪えきれぬ声を洩らした邪羅と同様――彼女もまた、思いがけぬ存在に色違いの双眸を大きく瞠った。
璃岩城の正面扉を開いたその先にいたのは。
黄金の光とも闇ともつかぬ気配を纏う存在だったのだ――！

2

なぜ、どうしてここに――いや、こんなところに⁉

いるはずのないひとが、目の前にいる――あり得ないはずの現実に、ラエスリールの心は混乱した。

黄金の闇とも光ともつかぬ輝きと澱みを併せ持つその人が、ここにいる理由がわからなかったのだ。

父さま⁉

陽光のようでもあり、同時に人の心を欲に縛りつける純金のようでもある色彩を、髪と瞳――否、全身に纏ったひとが、なぜか璃岩城の中にいた。

あり得ないことだ。

そのはずだ。

だが、ラエスリールはこれが現実のことだと認識していた。
まやかしや幻惑ではない。
「嘘だろ⁉」
邪羅の声に、自分が目にしている姿が、自分だけの目に映っているものではないのだと確信する。
父さま……なぜ。
いま、この時に——この場面で⁉
貴方がここで立ち塞がろうとするのですか⁉
叩きつけたいどうしようもない想いと問い——だが、ラエスリールはなぜか、それを喉の奥から取りだし、相手にぶつけようとは思えなかった。
なぜ、どうして——。
問いたいことは山ほど在る。
行く手を遮るその行為の意味を知りたい。自分を封じた行為の意味も。
そもそも、自分に何を望んでいるのか……望んでいたのか。
その意味があの別離の日から変わったのか変わらぬのか。

何もかも――そう、何もかもが知りたかった。
それでも――眩く、同時に意識を引きずり落とされそうになる黄金の輝きと澱みがそれを押しとどめる。
このまま、ここで立ち止まってはいられないことだけは、痛いほどにわかっているというのに――！
覚悟は決めてきたはずだった。
誰が阻んでも、自分は自らの心に決めたことをなすのだと。
なのに、相手が想定外の……王蜜の妖主……父であっただけで、その決意は容易く崩されてしまう。
父さま、父さま、父さま――。
悲鳴のように、喉の奥から飛び出しそうになる声がある。
その声――問いゆえに、どうしても自分は父である彼を前に平静であることができないのである。
父さま、父さま。
あなたは。

わたしの――。
生と死、そのどちらを望んで――。
いらっしゃるのですか。
知りたくて、知りたくて。
けれど、知るのが同じほどに恐ろしくて。
知りたいけれど、どうしても尋ねることができなかった問い。
記憶の最後で、人間として生きろと告げた父。
けれど、その後の記憶では受け取りようによっては「人間として死ね」と言われたも同然の扱いを受けた。
どちらが彼の本意なのか、知りたくて仕方ない。
同時に知るのがとてつもなく怖い。
立ち止まってはいられないことだけは確かで。
ラエスリールは大きく息をついた。
「父さま」
意を決して、彼女は口を開いた。

「わたしはその先に行かねばなりません」
それに対する黄金の魔王の答えは簡潔だった。
「まだ早い」
まだ、ということは、今でなければいいということだろうか。
無条件に自分を阻むつもりはない、と？
だが、それに頷けるかと言えば答えは否だ。
「今、行かなければならないんです」
アーゼンタールや蜜里やスラヴィエーラたちが、この先で命をかけて戦っている——それは彼らの戦いであり、自分が立ち入る権利はないかもしれない。
だが、かつて戦った妖貴の女性の言葉が正しいのであれば、その戦いさえ、自分に起因しているかもしれないのだ。
だとしたら、自分は成り行きを見守っているわけにはいかない。
イヤな、予感がするのだ。
自分の雛型に見立てられたという少女——彼女を利用して、何かを為そうとしている魔性がいる……それも、恐らくは強大な。

その思惑をうかがい知ることはできない。

だが、とてつもなくイヤな予感がするのだ。

成し遂げさせれば、自分の大切なものが粉々に砕かれてしまいそうな——決して看過できないことが引き起こされてしまうような。

漠然とした、だが強い不安は、目覚めて以来、胸の奥で広がり続けている。

自分のせいで巻き込まれた少女を放っておくわけにはいかない——それ以上に強い危機感が、ラエスリールを突き動かしている。

「父さま」

お願いですから、退いてください——。

そう口にしかけた言葉は、しかし喉の奥から放たれることはなかった。

璃岩城全体を、異常な静寂が包みこんだのだ！

消えたのは音だけではない。

城全体に満ちていた、ぞくりとするような妖気も力も……何もかもが瞬時に消失し、璃岩城自体の存在感さえ失せてしまった。

これは……一体、何を意味するというのか⁉

隣で邪羅が息を呑むのが聞こえた。
父ちゃん!?
必死に声を噛み殺しながらも、殺しきれなかった青年の言葉に、ラエスリールは唇を噛みしめた。
遅かった——間に合わなかったのか、自分は!?
父の背後に目を向けた彼女は、その瞬間、右の視界に違和感が生じるのに気づいた。
右目が——魅了眼が反応しているのだ。
なんだ!?　なにがおかしい!?
自問するも、その答えをすぐに見いだすことはできなかった。親しい少女の悲痛な声が、空気ではなく絆を通して伝わってきたからだ。
『いやよ、彩糸！　こんなのはいやぁぁっ！』
魂までも千々に引き裂かれたような、胸を締めつけられるリーヴシェランの声が。
『起きて！　動いて！　お願いだから！　彩糸、彩糸、彩糸いいいっっ！』
その声を耳にして、最早先ほど感じた異様な静寂の意味を疑う余地はなかった。
紫紺の妖主の影糸術によって、人形にされてしまった彩糸——かつてリーヴシェランの姉で

あった女性。

最早人間に戻る道はなく、その命は作り手である藍絲の思うがままであり……彼が望めば、それが潰えることはない……永遠でも。

そう……彼の命が尽きる瞬間まで。

その彼女が動かなくなったことの意味。先ほどまでの威容を失した脱け殻のような璃岩城のこのありさま。

何もかもが、ただひとつのことを示している。

「邪羅」

ラエスリールは静かに隣に立つ青年に呼びかけた。

恐らくはまだ、大きすぎる衝撃ゆえに現実を受け入れられずにいるだろう、もうひとりの弟のような存在に。

残酷かもしれない問いを放つために。

「進むか戻るかは、お前が選べ」

どちらを望む？

自分とともに進んで、それで現実をその目と魂に刻みつけるのか、あるいは傷ついた少女の

心を優先し、そのもとへ駆けつけるのか。
ラエスリールの言外の声を、彼は過たずに拾ったのだろう。
くしゃり、と泣きそうな顔を一瞬だけ見せると、「姉ちゃんも、けっこうひでぇ」と小さく洩らした。
だが、彼が洩らした弱音めいた言葉はそれだけだった。
一瞬で、隣に立つ青年の纏う気が変わる。
決断を下した証だ。
「悪い、姉ちゃん」
それでも、謝ってくる邪羅の心根の素直さ、優しさに、ラエスリールは知らず口元が綻ぶのを覚えた。
「無理を言って、ここまで連れて来てもらったのはわたしだ。謝らなければならないのはわたしのほうだろう」
淡々と告げる内容は、本心からのものだ。
だからこそ、他者の心を惹きつけるのだという自覚は彼女にはない。
邪羅はにかりと笑うと、こう告げてきた。

「うん、姉ちゃんのほうが危なそうなら、いくら後で恨み言積まれてもこっちに居残るつもりだったけど……何だか、この場は大丈夫そうだし。……なんだよな？」

確信しているだろうに、それでも尋ねてくるのは、彼が自身の判断に不安を抱いているせいではない。

この場にひとり残るラエスリールをそれでも案じてしまうせいだ。

「当たり前だ」

一言で返す。

邪羅が、笑顔でうん、と頷いた。

「じゃ、ちょっと行って来る」

軽い口調で言い残すと、乳白色の髪と藤色の双眸を持つ青年の姿はその場からかき消えた。

それを確認してから、彼女は目前の黄金の青年に再度目を向けた。

そう——父と瓜二つの姿を持ちながら、父ではない青年を。

ひた、と見据えて彼女は問うた。

「それで、お前は何者だ？」

と——。

※

先ほどから璃岩城を包みこんでいた静寂とはまた違う静けさが、両者の間に生まれていた。
父である王蜜の妖主としか思えない容姿も気配もそのままに、けれど違うとラエスリールが確信する相手が、ゆっくりと口を開くまで、多少の時間があった。
「何を？」
言っているのか。
問い返そうとする相手の意図を、しかし彼女は汲み取らずに一蹴した。
時間稼ぎだ。
直感に過ぎなかったが、それは確信でもあった。
「ご託はいい。お前は父さまではない。王蜜の妖主である父さまそっくりの姿と気配を纏っていても……それが、まやかしなどではなくても。お前は父さまじゃない」
あまりにもそのもの過ぎる容姿と気配を真っ先に示されたものだから、ラエスリールも気づくのが遅れた。

これまで対峙する機会のなかった邪羅は尚さらのこと。
ふたりとも、ころりと騙された。
いや、右目の違和感がなければ、今も騙されたままだったろう。
異様な静寂に包まれた璃岩城――そして聞こえて来たリーヴシェランの悲鳴。
思わずアーゼンターラたちがいるはずの城奥に目を向けた時、ラエスリールの右目は青年の姿が二重にぶれているのを捉えたのだ。
まやかしや幻覚ではない――幻が現実を隠すように上にかかっているのではない。
どちらも現実であるふたつの像が重なり合っている――そうとしか表現できない二重の像が視えたのだ。
ひとつは、黄金の闇あるいは光の化身たる王蜜の妖主のもの。そして、その奥に視えたのは――漆黒を纏い、かつて一度だけ相対したことのある相手と同じモノを抱え込んだ青年の姿だった。
確信を持って問いかけるラエスリールに、しかし相手は真摯に答えるつもりはないようだった。
「なにを以て、わたしがわたしでないと？」

王蜜の妖主そのものの気配と口調は、決して真似たものではなかった。
確信できる――彼は確かに王蜜の妖主そのものでもある。
だが、ラエスリールの知るそのひとではないのだ――彼女の父では。
いったいどんなからくりが、こんな現実を引き寄せたのかはわからない。だが、ラエスリールは確信しており、それを証立てる方法も、すでに気づいていた。
「ならば、わたしを呼んでみろ」
きっぱりとした口調で、彼女は正面から青年を挑発した。
「人間の名でも、魔性のそれでもいい。わたしの名を呼んでみろ」
ラエスリールでも朱烙でも。
口にした瞬間、それが決定的な証となる。
そのことをラエスリールは信じて疑わない――そして、そのことに気づいたからこそ、一年以上前の真実にも気がついた。
逃げ続ける日々――匿われていたガンディアの王宮の、宛てがわれていた一室に。
突然現れた父。
無言で自分の喉に手を伸ばし、自分はそれが父の意志だと信じたからこそ絶望とともにその

事実を受け入れた。

誰にも真似できるはずのない王蜜の妖主の姿と気配――目にしただけで、本人だと信じる以外の選択肢を許されない。

けれど、あの時と今では違うものがある。

母であるチェリクの体に招き入れられた長くはない時間……以前とは違い、導き手たる母の意識が教えてくれたさまざまなこと。

持って生まれたという以外、それまで意味を持たせることのできなかった魅了眼を、自らの意志で使いこなすやり方と、そうして広がった認識の世界。

母が、自らの負担を承知で自分の魂を迎え入れたのは、微睡み続けることによって、自分自身を忘れる娘の魂を現実に繋ぎ止めるだけの理由ではなかったのだ。

目覚め、立ち上がり、再び挑む日が来ることを知るからこそ、あのひとはそのための準備を調えてくれたのだ。

使いこなせば充分な戦力となる魅了眼を、ただの宝の持ち腐れとさせないために。

読み解いた事象をいかに理解し判断するかの経験を積ませるために。

……まあ、あまり親切だとかわかりやすいとかは言い難い内容ではあったけれど。

「呼ばない、か？　それとも呼べないか。ならば答えは出たも同じだ。悪いがわたしはお前の向こうに用がある。進ませてもらうぞ」

沈黙を守る青年に、真摯な眼差しを向けたまま――。

彼女は魅了眼がもたらすふたつの名を口にした。

「侍黄……それとも今は芝牙尖と呼ぶべきか？」

黄に……金に侍る者。

すなわち王蜜の化身に侍ることを宿命として下された者。

そして、今は違う名を定められし者。

残酷な事実を暴いたラエスリールの前で、青年の姿がゆらりと変じた。

父そのものであった姿が、揺らぐ光と闇との狭間で消え失せ、現在の彼の姿である漆黒の……虚を抱えたものへと変じる。

それを、ラエスリールは正面から見つめた。

男を包む空気が、一気に冷ややかな敵意に変じる様さえも、彼女は無言で受け止めた。

先を急ぎたいと思ったのは真実。

そのために、見抜いた相手をやり過ごすことができるなら、そうすることが早道だとわかっ

てはいた。
けれど。
ラエスリールにはそれはできなかったのだ。
かつて侍黄と呼ばれていた妖貴の背後に、彼女は過去に対峙した妖貴の女性が抱えていた者と同じ虚を認めた。
それは、一度冥の海に身を浸しながら無理矢理現世に引き戻された者しか持ち得ぬものだ。
二度と冥の海には戻れず、仮初めの心身をただ刻々と虚に蝕まれていくだけの。
それでも、そんな地獄に突き落とした誰かの命に従わされて。
このままでは虚に呑み込まれて消え失せるか、現世の気との摩擦で意識全てがすり減らされるか——そのどちらかしかないのが視えて。
だが、彼がそのどちらの最期も望んでいないことも、わかってしまった。
だから、ラエスリールが選べるのは、ただひとつの道しかなかったのだ。
「わたしは進む。だから……止めたければ、止めればいい」
力ずくで。
他に決着がつく道はない。

ラエスリールは不敵な笑みを口元にたたえ、かつての父の側近であり、その命をも委ねられた青年に言い放った。

「できれば、の話だが」

途端に、青年を包む気が変わった。

「ほんの瞬きにも満たぬ時間としか認めてはいなかったのですが――ね」

お変わりになられた。

心底感嘆するような声音で告げられ、ラエスリールは少しだけ笑った。

「そう思ってくれるなら、退いてくれと言いたいところだが……」

わかっていた。

それは叶わぬ道なのだと。

「そうはいかないんだろうな」

「ええ」

と、かつて侍黄――そして今は芝牙尖と呼ばれる青年はあっさりと……はっきりと頷いた。

「わたしを支配する主はふたり……次第によってはわたしの存在は引き裂かれるかもしれませんが、今のところふたりの意志は重なっておりますから」

行かせません。
青年ははっきりと言いきった。
行かせない、この先には絶対に行かせない、と。
ラエスリールの答えもきっと知った上で。
「うん」
と、だから彼女は頷いた。
そうして、答えた。
「じゃあ、だからこそ……行かせてもらう」
告げると同時に、意識を右目に集中する。
魅了眼。
全てを見抜き、読み解き、理解することによって他者を支配する絶対的な力。
だが、そうではない。
そうばかりではないことを、ラエスリールは母の経験則から学んでいた。
強い意志の光をたたえ、自分をこの場に留めようとする漆黒の青年から、聴こえぬはずの声が聴こえる——虚に蝕まれる魂の上げる声が。

それを拾い上げられたのは、まさにこの魅了眼の力。
気づくことで、理解を広め、想像することで道を増やす。
そう……支配し、従えるためではなく。
「行かせて、もらう」
お前の命を解いてでも――。
その魂を解放して。
「わたしは先に進まねばならない」
言いきったラエスリールの前で、芝牙尖がどこか嬉しげに笑った――。

3

侍黄、と――。

呼ばれた瞬間、芝牙尖の胸の奥は大きく震えた。

以前、雛の君の居城で柘榴の妖主に呼ばれたときは、相手を殺したくなるような憎悪しか湧き上がらなかったというのに、目の前の女性が口にしたそれは、自分の心を心地よく震わせたのだ。

侍黄――それはかつて、彼のものであった名前。

冥の海に下るとき、返そうとした彼に、下した以上はお前のものだから、最後まで抱いていけ――そう言い、命のひとつを永遠に許してくれた主のそばに常にあるべき者としての、唯一にして絶対の、名。

冥の海から引きずり出された時点で、別の名を与えられたために、二度とそうは戻れないか

つての自分。

だからこそ、その名は身を引き裂くような痛みを伴うものと化してしまったはずだというのに……目前の女性が紡いだ声と響きは、歓喜にも似た思いを彼にもたらしたのだ。

ラエスリール――あるいは朱烙。

王蜜の妖主と人間の魅縛師との間に生まれた――本来ならば、生まれるはずのなかった娘。

この世界の始まりから最後までを、ただ見つめ続ける役目を負った主が、ただの一度押し通した望みによって世界に迎えられた異端の魂。

生まれた娘を、主であったひとがどんな思いで見つめたのか、芝牙尖にはわからない。わかるのは、恐ろしいまでの葛藤がかのひとの胸中を襲ったであろうことだけだ。

世界の始まりに生まれ落ちた――最古の者である彼は、他の妖主とは比較にならぬだけの強く重い枷が創造主によって嵌められている。

世界の始まりと終わりを見届けるという務めは、世界の管理をも意味している。

不安要素の排除もまた、彼の役目に含まれていた。

そんな自分の娘として、人間でも魔性でもない――かつてこの世界に一度として存在したことのなかった魂を持つ者が生まれたのだ、葛藤がなかったはずがない。

それでも主は彼女を黙認したのだ……恐らくは妻である女性の望み通り、人間として生きる娘の存在を。

だが、その計らいは柘榴の妖主の関与によって台無しにされた。

否、彼女が父に次ぐ魔王を引き寄せたのか。あるいは彼女の誕生に関わる何者かが、世界の表舞台に彼女を送り出すために、運命の糸に仕掛けをほどこしたのか……。

真実がどこにあるのかはわからない。

だが——視えぬ糸に導かれたように、彼女はついにここまで来た。

世界を支える五要の一——翡翠の妖主を消失させ、第六の妖主を目覚めさせた。

世界に終焉をもたらす者を。

自らを終焉のための鍵となしたことを、彼女は恐らく気づいていない。六人の妖主の誰も持ち得ないその鍵は、世界を破壊するための唯一の力となる——第六の妖主が生み出す新たな世界のためには、この世界は一度破壊されなければならないのだ。

再生のための破壊の鍵——それが目の前の彼女であり、本来ならとうに鍵だけを取り出されているはずの存在だった。

世界を再生するために生まれた雛の君は、まず最初に彼女から鍵を取り出すはずだったのだ

……漆黒の妖主が、それを躊躇ったのはラエスリールの魂が、あまりにも異端過ぎたことに因る。

彼女から『鍵』だけを取り出せるならよし――だが、そうでなければ何が引き起こされるか知れない。

彼女のような魂は他にはなく、だからこそ雛の君はその決断を下せなかった。

結果――第六の妖主たる少女は、目前の娘に代わる第二の鍵を育て上げることを選んだのである。

残された五要は四人――内ひとりを捨て駒に、安全な鍵を作り上げ、手に入れること。そのために少女は五年近い月日をかけた。

鍵となり得る最も可能性の高い子供を捜し出し、鍵となるべく道を整え、細心の注意を払ってそのためだけの道筋を作り上げた。

そして、その鍵はほんの先ほど完成した。

完全なる沈黙に包まれた璃岩城の様子が、何より雄弁に城の主の散命を物語っていた。

二人目の五要が倒され、倒した娘に第二の破壊の鍵が宿った――。

あとは雛の君がそれを回収すれば終わりだ。

この世界に終焉の幕を引き、新たな世界を構築するために、雛の君は最後の力を手に入れることになる。

それこそが彼女の存在意義であり、自分はその役目を助けるためだけに冥の海から引きずり出された仮初めの駒だ。

そのために、目前の女性を足止めする必要があり、そうしてそれは、かつての主の願いに反するものではない。

冥の海から現世に引き戻され、一年ほどが経ったころだろうか——芝牙尖はゆるゆるとかつての主の記憶を取り戻し、そのほとんど感じ取れない気配をそれでも辿ることができた。

餞として与えられた主の命が、それを可能としたのかもしれない。

五要の消失に伴う雛の君の誕生——その存在に真っ先に額ずくことを創造主から定められた黄金の魔王は、務めと思いにその身を引き裂かれていた。

五要の頂と定められた第六の妖主に従う道を選ぶことは、自身の娘を危険分子と見なすことを意味していた。

雛の君が警戒し、手出しを控えるほどの異端を、最初に膝をついた彼が放置しておくわけにはいかなかったのだ。

最善は、その存在の抹消――主は一度はそう心を決めたのかもしれない。
配下にその命を下したことを知っている。
だが、あるいは主は決してそうはならぬことも知っていたのかもしれない。彼女のそばには自分に次ぐ時を生きた強大な男がいるのだから。
柘榴の妖主が、自分の命から娘を守ると――。
だが、同時に主はその柘榴の妖主ですら、雛の君には従うしかないこともわかっていたはずだった。
世界で二番目に生み出された命――魔王。
強大な力は、しかし創造主の強い束縛をも意味する。
どれほど奔放な性格の主であろうが、そんなものは関係ない。存在自体を縛める枷は、生まれる前から植えつけられたものだ。誰にも外すことなどできない。
では、柘榴の妖主すらも、ラエスリールの命を守る絶対の盾とはなり得ない。
その絶望――かつての主の葛藤に気づくことができたのは、やはり彼から下された命があったからか。
誰よりも愛しく大切な主――だが、いま自分が仕えるべき相手ではない。

彼のために動く自由は、芝牙尖にはなかった。
それでも……揺れる黄金の魔王のために、彼は一度だけ雛の君の指示を仰がず、動くことを選んだ。
あの娘を死なせたくない。
王蜜の妖主のぎりぎりの願いを叶えるために。
ガンディアの王宮に匿われていたラエスリールを訪ね、下賜された命を纏って彼女の前に立った。
娘は信じられないと言いたげな顔で、しかし自分が伸ばした指に抗わなかった。
『父さま……なぜ……』
絞り出されたか細い声に、自分は答えを返さなかった。
真球の黄玉にその魂を封じ、現実の肉体にはたやすく戻れないよう幾重にも不可視の枷をかけた。
いずれは目覚められるように。
だが、すぐには目覚められないように。
雛の君の望みが叶い、王蜜の妖主が葛藤から解放された暁にこそ、解ける眠りの呪縛をかけ

た。

だが――芝牙尖の仕掛けは、それをよしとしない幾人かの存在によって破られた。

死なぬだけでは意味がないのだと言いきる彼女の母親と、これまで彼女を支えてきた芥同然の人間たち……そして、何より彼女自身の決意によって。

ここまで来、そして自分の目前に立っている。

父である王蜜の妖主とも、左目を与えた柘榴の妖主とも違う朱金の眩い輝きを纏って。

美しい、と。

芝牙尖は無条件に思った。

雛の君が手を出すのに躊躇ったのも道理だと。これは確かに下手に干渉すれば、何を引き出すか知れない恐ろしい未知の匣だ、と。

同時に思った。

この娘がたぐり寄せる未来を見てみたい――と。

それはこの身では到底かなわぬと知ってはいたが。

そして、それを望むわけにはいかないのが今の自分だ。

残念だ。

思いながら、芝牙尖は自分に与えられた役目を全うするために動いた。
第二の鍵はすでに生まれた。
ならば、今の主である雛の君がそれを手にするまでの多少の時間を、ここで稼ぎださねばならない。
『お急ぎを、雛の君』
空気を震わせることのない声を、遠い虚空の城にある主に届け、彼は笑った。

※

男を包む気が変わったのを、ラエスリールは肌で感じた。
嬉しげに笑った直後、妖貴は空気を震わすほどの戦意を放った。
どうしても、黙って通してはもらえないらしい——予想はしていたが、小さな焦りが胸に湧くのは仕方なかった。
早く、早くと、心の奥から急かす声が聞こえるのだ。
一刻も早く奥の広間にたどりつかねば、大切なものが失われてしまう——直感でしかない、

だが確信が胸に大きく広がっていく。
最早問答は無用だ――芝牙尖もそれを望んではいないだろう。
きり、と唇を噛みしめて、ラエスリールは右目――琥珀の魅了眼に意識を集中した。
ただひとつの魅了眼が熱を帯びる。
その輝きが琥珀から金に変わったことが、見ずともわかる。
芝牙尖の命のありさまを正確に把握するため、彼女は集中すると同時に、護り手たちから渡された封魔鈴の手纏にそっと触れた。
本来魔性の命のみを引き寄せ封じる封魔具だが、今の自分なら違う使い方ができることを知っている。
引き寄せるのは――。
視える――育ちつづける虚を抱えた命。
そして、それとはまた別の、命を侵食するおぞましい……陰。
どちらだ――彼の命を真に危険に晒しているのは⁉
虚は有のこの世界自体にとって危険なもの――そこには温度もなにもない。ただ虚ろな無が広がるだけだ。

あれは、世界にあってはならぬもの。
だが、ラエスリールはもうひとつの陰のほうがより気になった。
母のなかから見た緋陵姫に、同じものがあったのだ。
あれは何だ？
内心の迷いを読み取ったか、芝牙尖の指先から放たれた闇が襲いかかってくる！
「敵を前に、迷う余裕がおありですか！」
嘲りも露な声に、ラエスリールはその場を飛び退いた。
その闇は純粋な闇が凝ったものだ——これほどに虚と陰に侵されながら、芝牙尖の力は恐ろしいほどだ。
父の側近だったというのも頷ける。
往事の彼が相手であれば、紅蓮姫なしに戦うことはできなかったかもしれない。
だが——。
「余裕はなくとも考えることはあるんだ」
考えなしに戦うのは死に近づくだけの愚行だろう。
続けた彼女に、漆黒の青年がくっと口の端をつり上げた。

二度目の攻撃がくる。
「以前のあなたに聞かせてさしあげたい言葉ですね」
闇が鞭のようにうねりながら、ラエスリールを捉えようと跳んでくる。
「邪魔だ」
短く告げ、彼女は闇を手纏に導いた。
魔性の命を封じる封魔鈴に、純粋な妖気が呑み込まれる。
芝牙尖の双眸に、一瞬感嘆の色が浮かんだ。
「なるほど、そういう使い方もできるようになられたと」
確かに変わられたのですね。
感心したように頷かれても、はっきり言って嬉しくはない。
「言っておくがな。わたしは以前だって、何も考えずに敵と戦っていたわけではないぞ！」
考えようにも相手がそんな暇をくれなかったんだから、戦いながら勝機を探るしかなかったんだ！
自分で言っていて、少し悲しくなった。
その場に応じて臨機応変に対応してきたといえば聞こえはいいが、早い話行き当たりばった

りに戦っていただけとも言えるのだから。

だが、仕方ないではないか。

いつだって、相手はこちらの都合などお構いなしに戦いに巻き込んでくれたのだから——そうでない数少ない例外だとて、引くに引けない事情があったため、やはり周到な準備だとかができたためしはないのだ。

だが、それを言っても始まらない。

いかに相手に力を出させずに戦うか——敵対した者たちは、それを実践していたに過ぎない。相手が上手だったのだ。

いかに有利に戦うか——考えることも立派な戦いだ。

だから、芝牙尖の攻撃を受け止めながら、今も考えている。

闇そのものは、封魔鈴に封じることができた。では、あの虚はどうだろう……あの陰は？

彼からそのふたつを切り離すことは、はたしてどちらに働くのか——彼の力を殺ぐことになるのか、それとも逆に彼に健常な力を取り戻させることになるのか。

いくら考えても、こればかりは試してみなければわからない。

行くしかない。

ラエスリールは床を蹴り、一気に芝牙尖に駆け寄った！
攻撃の闇が来るのを、睨みつけて一喝した。
「邪魔だ、散れ！」
支えを失ったかのように、闇は無力なただの闇に戻った。
意識を澄ませて、彼女は彼から滲み出る虚の緒を探した。
じわり、と闇と似て非なる黒い染みのようなものが視えた。
どうだ、封じられるか⁉
ラエスリールはそれを凝視し、「来い」と命じた。
じわり――じわり。
命じられるまま、それがラエスリールの手纏に伸びる――と、その直後！
巨大な玻璃が砕けるような、甲高い音が空間を満たし――ラエスリールは壁面に叩きつけられた！
「愚かな……何ということをなさる！」
彼女とは逆の方向にある壁にたたきつけられた芝牙尖が、初めて余裕のない声で叫んだ。
「虚は有と相反するもの……互いに反発するのはわかりきったことでしょうに！　あなたは考

えていると言ったくせに、そんなこともわからないほど馬鹿だったんですか！」

……酷い言いぐさだ。

過去、嘲られたことなら数え切れないほどあるが、心底呆れられ叱られたのは初めてだ。

「……試してみないとわからないこともある」

そう……もうひとつ。

あの陰のことを。

打ちつけた肩が痛みを訴えたが、気にしてはいられなかった。

芝牙尖が立ち上がる前に、そちらを試してみなければならない。

あの陰を取り除くことで、彼の心身にかかる負担が少しでも減じるのかどうか！

「行く」

言い切り、ラエスリールは駆け出した！

目指すは芝牙尖の左腕――あの陰が最も外側近くまで広がっている場所だ。

引きずり出し、手纏に封じる――そのために！

彼が体勢を整えるより早く、彼女はその腕に手を伸ばした！

触れて、それが何であるのかを知るために――だが、彼女の意図に気づいたらしい青年によ

って阻まれた。

「馬鹿な真似をするなっ！」

怒鳴りつけるなり、芝牙尖は身をよじるでなく、彼女の今にも届きそうな指先から、自らの左腕を取り上げた……引きちぎることによって！

そして驚愕に目を瞠るラエスリールに思い切り闇を叩きつけてきた！

防ぐ間もない攻撃に、彼女の体は宙に舞う。

何とか受け身は取ったが、両者の間には先ほど以上の距離が生まれていた。

漆黒の青年は、自ら引きちぎった左腕を床に叩きつけると、これ以上はないほどの怒りに満ちた眼差しを向けてくる。

「何をなさるつもりだったのです⁉　アレに触れようなどと……それでご自身がどうなるか考えたことがおありですか⁉」

わからないからこそ、確かめようと思ったのだが、青年の剣幕を前に、ラエスリールは答えることができなかった。

青年は尚も続けた。

「どこまであなたは馬鹿にできているのです⁉　なぜ、その手纏にわたしの命を封じてしまわ

ない!? 魅了眼でわたしの命を解くのでもいい……どうして、このおぞましい泥闇に触れようとするのです！　わたしはそんなことは望んでいない！」

憤然と言いきり、芝牙尖はちらりと廊下の奥を見た。

その体に異常が生じていることなど興味もない顔で。

「芝牙尖……お前……」

引きちぎられた腕の付け根から、どろどろした闇とも毒ともつかぬ何かが溢れ出し、彼の足下に滴り落ちていく。

じわり、じわりと広がるそれは、やがて彼の足に触れ、まるで生き物のようにそのつま先から這い上がっていく。

漆黒の青年を——呑み込んでいく。

「さあ、姫君。あなたはわたしにこれ以上時間を割く余裕はないはずです。これが外に出て来た以上、手纏に封じることも無意味です。これを世界に溢れさせないためにも、ここでわたしの命を解いてしまいなさい」

あなたにはできるでしょう？

答えを望んでいないその問いに、ラエスリールは唇を噛みしめた。

彼を退けても先に進むつもりだった――それは今も変わらない。
だが、叶うなら彼の命を蝕む異様な陰を取り除いてやりたかった。
彼の腕から溢れ出した『泥闇』と彼が呼んだものが、彼の命を糧にして、恐ろしい勢いで育ちゆくのを目にした今でも、その思いは変わらない。
けれど――同時にわかってもしまった。
最早、それは魅了眼の力を以てしても不可能なのだと。彼の命を苗床としたそれを引き剝がすことはできないのだ。
「……わたしが余計な気を回したせいか」
それが彼の命の終焉を早めてしまったのか。
「そうとも言えますし、そうではないとも言えますね。どの道、この身は朽ち果てるしかありませんでした……わたしは、その前にひとつでも我が君のために為せることを為したかっただけです」
だから――。
「満足です。さあ、姫君。もしもあなたが父君に仕えた者に対して、かけらでも情を覚えてくださるのなら……わたしの命がわたしのものであるうちに、綺麗に解いて消してください」

それこそが、真実彼の願いだと知った。

だから、ラエスリールは敢えて問いを重ねはしなかった。

彼はすでに必要な時間を稼いだことを確信し、最期の在り方をこの自分に期待とともに委ねているのだ。

きり、とラエスリールは胸が痛むのを感じた。

間に合わなかったのだろうか、自分は……彼のことも、アーゼンターラのことも？

だが、不思議と絶望はない。世界を読み解くことを知った今、そう感じる以上、道がすべて閉ざされたわけではないことを確信している。

けれど、芝牙尖に関してだけは。

「芝牙尖……かつて侍黄の名を持ち、我が父王蜜の妖主の第一の臣下として生きた誇り高い命よ……」

金に輝く瞳を向けて、彼女は彼の望みをかなえた——。

4

発作にも似た笑いの衝動が治まった時、スラヴィエーラは感慨深いものを覚えながら、最年少の同僚の少女に目をやった。

未だ抜き身のままの紅蓮姫を、必死に護り手である少女から遠ざけようとしている姿は、以前と変わらず見えるというのに、いつの間にか、この場にいる誰よりも心強く成長していた。

子供はいつまでも子供ではない。

当たり前に耳にしたり口にする言葉が、ずしりとした重みをもって胸中に広がる。

本当に、子供はいつまでも子供ではない——子供だと思っていたら、遠からず追い抜かれてしまうだろう。年長者として、それはまだ先のこととしておきたいものだ。

そんなことを思いながら、スラヴィエーラはゆっくりアーゼンターラに近づいた。

ふと見れば、マイダードが床に転がったままの紅蓮姫の鞘を拾い上げている。

考えていることは同じらしい――「いやになるよなあ」と目が訴えかけてくるのを、敢えて無視した。

年寄り同士、子供の成長を語り合うような真似をするつもりはない。

……まあ、姉として、妹の成長を喜ぶぐらいのことはしてもいいが。

そこまで考えた時、彼女の脳裏に浮かんだのは、浮城の食堂でよく見かけた一団が繰り広げていた会話だ。

ラエスリールが帰還するごとに、こづき回しながらあれこれ彼女を突いていた。

内容はといえば、呆れるしかない他愛ないことばかりだったが、まさかあの一団の心境が理解できる日が来るとは思わなかった。

いじり倒して構い倒したいほどに、誰かが可愛くて仕方なくなるなど。

彼らのことを、過保護だとはもう言えない。目を離せば何をしでかすか――何を成し遂げるかもわからない存在を前に、年長者としては本人のかわりに周囲に目を光らせる以外の何ができるというのか。

うっかり奈落に転げ落ちないように、うっかり毒蛇の巣に手足を突っ込まないように、あっさり泳げない身で川に飛び込まないように……アーゼンタラに向ける心配は、ラエスリール

にも大概当てはまることだろうから、本当にもう言えない。
「ほら、紅蓮姫よこしな」
声をかけて、アーゼンターラの持つ破妖刀を受け取ると、菫の瞳の少女は、恨みがましそうな目を向けて来た。
「なんだい？」
「だって……あたしが必死に叫んでたのに、蜜里は離れてくれないし、スラヴィたちは爆笑するし……ひどいわ」
言われた瞬間、またしても笑いがこみ上げてきたが、スラヴィエーラは腹筋に力をこめてそれを抑えた。
代わりに、しみじみと答えたのだ。
「だってねえ……剝き出しはないんじゃないかと思うんだよ、剝き出しは。せめて抜き身のままだとかって叫ばれたのなら、あそこまで笑いのつぼにははまらなかったと思うんだけどね」
それに、ご馳走に満足して紅蓮姫も暴れなかったじゃないか。
真紅の刀身を眺めながら、それでもスラヴィエーラは破妖刀を鞘に収めた——話題に誘発されて、紅蓮姫が食事を思い出したらまずいと判断したのだ。

それから、彼女はひとつだけ気になっていたことをアーゼンターラに尋ねた。
今後のためにも、これだけは訊いておかなければならないことだった。
「ターラ、あんたが蜜里に魔具を渡してしまえって言った時……最初から、ああするつもりだったのかい？」
勝算あっての言葉だったのかどうか——それは是非とも確認しておきたいところだ。
この先もチームを組むなら、彼女のことはよく把握しておかなければならないのだ。過小評価もその逆も、ぎりぎりの戦いの場にあっては命取りとなる危険がある。
これに、アーゼンターラは「ああするつもりではあったけど、完全に勝算があってのことかどうかと言われると……」と尻すぼみの答えをよこした。
「ターラ？」
まさか、一か八かの賭けだったのか？
だとしたら、自分たちは単なる運に救われたということになる。勿論、戦場にあって完全な勝算を望むのは難しいし、生死を分けるのが運だという話も珍しくはない。
だが、そうなると……。
スラヴィエーラの表情が曇ったことに気づいたのだろう、アーゼンターラが慌てたようにぶ

んぶんと頭を振った。

「違うの！　紅蓮姫は動いてたし、腕を持ち上げることができれば、投げることぐらいはできるだろうって思ってたわ！　紅蓮姫のことだから、そうなったら間違いなく心臓目がけて飛んで行ってくれるだろうとも思ってたし！　ただ、それも紫紺の妖主の意識がこちらに向いてなければの話で……だから、あのひとの意識を逸らすようなことが起こらないかな、とは思ってたってことで……」

この言葉に、スラヴィエーラは小さく息をついた。

「……そうしたら、蜜里が魔具を噛み砕いた、と」

「そう」

こくこくと頷くアーゼンターラの顔を、しげしげと見つめながら、この娘はきっとわかっていないのだろうな、と思った。

諦めない心、蜜里を案じる思い――強い強いそれらが連動して、奇跡のような今があるのだとは。

あの魔具なしに勝利は望めないと、蜜里を含めたほぼ全員が信じていた。だから渡すなと自分は叫んだ。

けれど、アーゼンターラは――蜜里と魔具を単純に秤にかけたのではなく、か細いながらも勝利への道筋を見いだした上で、違う言葉を放ったのだ。

そして、その思いが、蜜里に決断させた。

言うなれば、ふたりの絆が呼び寄せた勝利だったのだ。

これはわたしもうかうかしてられないね。

頭の固い大人として、妹分に庇われる足手まといになることだけは断じて避けたいではないか。

「わかったよ。そういうことなら、いい。ターラ」

愛しさに手が伸びた――。

「よくやった。頑張ったね」

だが、これからは彼女だけが頑張るような目にはあわせない――心に固く誓いながら、スラヴィエーラは「そういえば」と呟いた。

訊きたいことがもうひとつあったことを思い出したのだ。

「ターラ、一応訊いておきたいんだけど、あんた浮城の籍はどうするつもりなんだい？」

思いもかけない質問だったのか、アーゼンターラは菫色の瞳を大きく瞠って「どうするっ

て？」と問い返してきた。

「いや、あんたが浮城に籍を置いたのは、妖貴に攫われた……あー、その家族を取り戻すためだったろう？　紫紺の妖主を倒したおかげで、無事弟も取り戻せたことだし、一緒に暮らしたいんじゃないかと思ってね。だけど、浮城に籍を置いたままだと一緒には暮らせないだろう？　それとも、弟くんにも何か特別な力があるのかい？」

それなら、候補生として弟くんを浮城に迎えることも可能だろうけど……。

尋ねながら、スラヴィエーラは自分に舌打ちした。

どう考えても無理がある――本当のリメラトーンが、妖貴の手に落ちた後、彼らのために動いていたことはすでに上層部は把握している。そんな彼を――仮に特別な力があったとしても、だ――浮城に迎えるとは思えない。

だとすれば、一緒に暮らすには、アーゼンターラが浮城を退く道しか残されていないのだが……それこそ、上層部は決して首肯しないだろう。

紅蓮姫の使い手にして、純血の人間の少女が、魔性の王を倒したのだ――浮城にとって、これほど貴重な戦力はない。

ラエスリールのように、出生に問題があるわけでもない、瑕瑾なき理想の看板だ。

手放すはずがない。

通常、浮城の住人には籍を抜く権利が与えられている——まあ、浮城に借金が残っていなければの話だが。

また、要請があれば依頼を受けるという条件で、浮城以外に居を構えることも可能だ。

だが、アーゼンターラに対しては、浮城はどちらも認めないだろう。彼女はあまりにも、浮城にとって魅力的な存在になってしまった。

あー、言うんじゃなかった。

自己嫌悪に陥るスラヴィエーラの様子に気づいているのかいないのか——きょとんとした顔を小さく傾げていた少女は。

次の瞬間、はっきりと答えた。

「いずれは一緒に暮らしたいけど、浮城を辞める気はないわよ、あたし」

「そうなのかい？」

意外に思って聞き返すと、銀髪の少女は「だって」とその理由を口にした。

「ようやく少しは役に立てるようになったかなって思ったところなのに、辞められないわ。それに、辞めたら紅蓮姫と離れなくちゃいけないでしょう？　そりゃあ、あたしは前世と違って

彼女の恋人にはなれないけど、大事につきあっては行きたいと思ってるの……まあ、蜜里に食指を動かす悪癖だけは何があろうとなおしてもらわないといけないけど」

　他にも経済的問題があるわけだし……ぶつぶつと洩らすアーゼンターラは、しっかりと現実のことも踏まえてそう決めたらしい。

「あれ？　離れたくないのは紅蓮姫だけかー？　仲間に対して、それは冷たくないかい、ターラちゃん？」

　刺青の青年が割り込んで来て、にやにや笑いながら意地の悪いことを言う。

　どうせ、アーゼンターラが慌てて「そんなつもりじゃ」とか何とか言うさまを見て楽しむつもりなのだ。

「あんたは大人げないよ」

　冷ややかに窘めるスラヴィエーラの声と、重なるように少女が答えた。

「だって、浮城を離れて会えなくなるのは紅蓮姫だけじゃない」

　譬え浮城を辞めたとしても、自分たちと会えなくなるわけではない――。

　その言葉に込められた、彼女の信頼と好意に、気づけぬほど愚かではない。

　ああ、しまったわ。本当に可愛い。猫かわいがりしないよう、気をつけないと、あのひとた

ちと同じ過保護集団呼ばわりされてしまう。

それだけは遠慮したい、とスラヴィエーラが思った時のこと――。

「いいえ」

聞き覚えのない、まだ年若い少女の声がその場に響いた。

はっとして振り返った先に、スラヴィエーラは漆黒の巻き毛と闇色の瞳を持つ、ぞっとするほど美しい闇の化身を見た。

漆黒を纏う魔性は妖貴のはずだ。

だが、その少女は先ほど対峙した紫紺の妖主と同じほどの存在感でその場に佇んでいた。

そして、アーゼンターラだけを見つめながら、にこりと美しい笑みを浮かべた。

「初めまして、アーゼンターラ。ありがとう……そして、さよなら。あなたの役目は終わったの。さあ、その鍵をわたしにちょうだい」

※

その刹那――。

何が起こったのか、アーゼンターラは理解できなかった。
いつの間にか、漆黒の少女が自分を支えるように抱き留めていた——いや、本当に支えているのだ。
ずるり、と足が床をすべるのを感じる。
なぜ？　どうして力が入らないの？
困惑する彼女の耳元で、少女が優しげに囁いた。
「ごめんなさいね。本当は時を改めて迎えに来ようかとも思ったのだけれど、四の君が余計なことをなさったものだから——」
急がなければならなくなったの。
ごめんなさいね。
優しく優しく響く声——けれど、そこに真実はない。
ずるり——何かが引き抜かれる音がする。
何が？　すぐ近くだ。すぐ近くで、何かが何かを引き出そうとしている。
「な、に……」
目を凝らして、ようやくアーゼンターラはその正体を知った。

漆黒の少女の右手が、自分の左胸に埋まっている。そして、何かを摑んだまま、胸から抜かれようとしている。

「ターラ！」

「ターラっ！」

「やめろ、ターラに何するんだ！」

「なぜ届かん⁉」

皆の声が、ひどく遠い。

少女の右手が完全に胸から抜ける——その手に何か光のようなものを認めたのを最後に、アーゼンターラの意識は闇に沈んだ。

「本当にありがとう、アーゼンターラ。あなたのおかげで破壊の鍵が手に入った……わたしは、これで——」

深い底なしの闇に落ちていく間に、少女の声だけが変わらず耳元で聞こえたような気がしたが……やがてそれも消えてしまった。

璃岩城の漆黒の石床に——心臓を貫かれた少女の体がゆっくりと崩れ落ちた。

その瞳は開いたまま……けれど、そこに光はなかった——。

※

璃岩城の大広間――主を失い、今にもその姿を失おうとしている城の中心で、第六の妖主にして全魔性の王たることを定められた少女が高らかに宣言する。
「わたしに連なる小さき者たち。急ぎなさい、残された時間は少ない。わたしはすでに破壊の鍵を手に入れた！」
その右手には、アーゼンターラの左胸から抜き取られた光。
旧き世界を破壊し、新たな世界を築くために不可欠な鍵。
「急ぎなさい、人間で遊びたいのなら」
その理由を、彼女は最後に告げた。
「わたしが築く新たな世界に、人間が生まれることはないのだから！」
と――。

あとがき

さて、この本が発売される頃には、梅雨も明け、本格的な夏を迎えていることと思いますが、皆様如何お過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

破妖の剣『鬱金の暁闇』第九巻をお届けします。

長らくお待たせしました、本編ヒロインがようやく本復活いたしました。

前巻で意地悪をされたせいもあってか、今回回想も含めて思い切り突っ走ってくれましたが……楽しんでいただけたでしょうか。

全開のラスは、今回書いてて思ったのですが、アーゼンターラの猪突猛進パワーどころではありませんでした。

なぜそんなに全力疾走なの、力抜くとこは抜いとかないと、途中でぱたっと行き倒れるでしょう！　と、思わず説教したくなる勢いでした。

今回で、なんとか八合目まで辿り着いたかな——と思ってますが、まだ謎が残っている上、巨大な山（今回は中規模大の山でした）越えも控えているので、完結に向けての明確な宣言が

できません……申し訳ありません。

あと、作中における「自己犠牲」についてですが、あくまで安易な自己犠牲に対する否定的記述となったものです。全てのそうした行為を否定するものではないことをご理解ください。

いろいろと語りたい誘惑に駆られますが、それらは作品で語られるべきことだと思うと、本当にあとがきに書けることがありません。

あと自由にここで書けるのは近況ぐらいですが……我が家の愛猫が春になった早々、わたしの部屋にトカゲを生きたまま持ち込み、その子が仮眠中のわたしの喉を横断していく感触で目が醒めたというぐらいの話しか……（笑）。「充分衝撃的な話でしょ！」と友人には指摘されましたが……どうなのでしょう？　因みに、そのトカゲは虫取り網（手製）で捕獲した後、庭に逃がしました。

今回もイラストの小島榊さんをはじめとする関係各所の皆様に、大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

それでは、また次巻にて――お会いできますように。

平成二十三年　夏

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金（うこん）の暁闇（ぎょうあん）9

COBALT-SERIES

2011年8月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著　者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社集英社

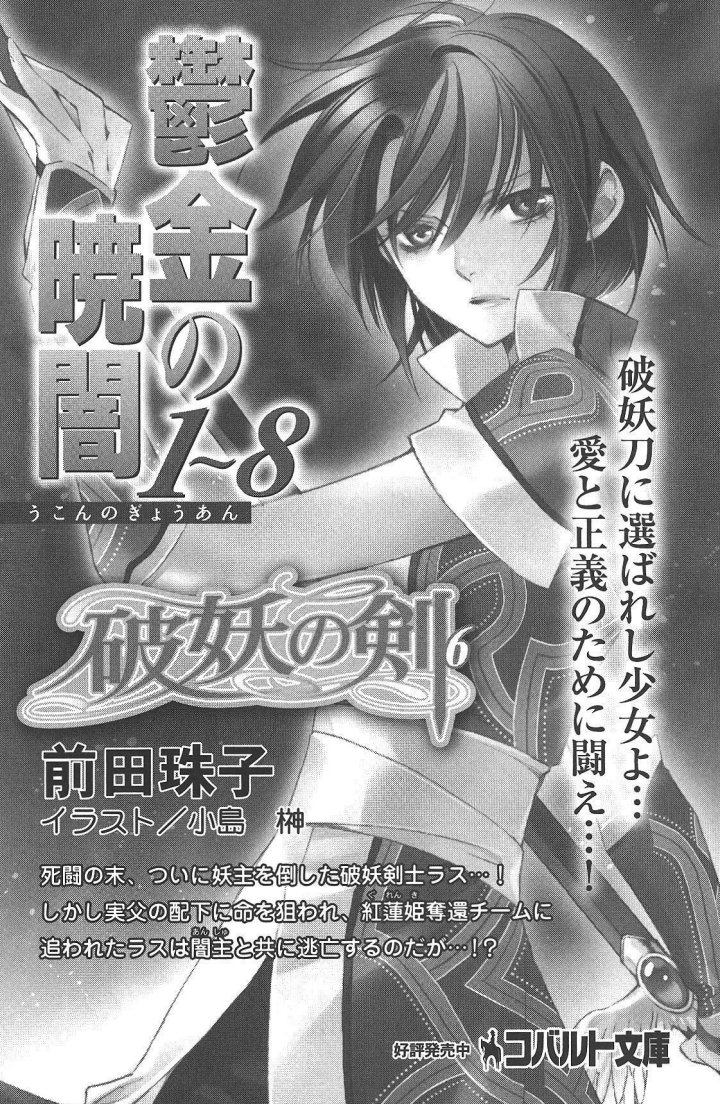
〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2011　Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。

ISBN978-4-08-601545-5　C0193


拝啓 黄金の暁闇 1~8
うこんのぎょうあん
破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え…！
破妖の剣 6
前田珠子
イラスト／小島 榊
死闘の末、ついに妖主を倒した破妖剣士ラス…！
しかし実父の配下に命を狙われ、紅蓮姫奪還チームに
追われたラスは闇主と共に逃亡するのだが…!?
好評発売中
コバルト文庫


破妖の剣 外伝
珠玉の超(スーパー)ファンタジーに酔いしれよ!!
言葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀(こうこはく)
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバワヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島　榊
好評発売中
コバルト文庫

まんが版

破妖の剣

二

～柘榴の影～

[漫画] 松元陽

[原作] 前田珠子

収録作品:破妖の剣

定価／420円(税込)

マーガレットコミックス

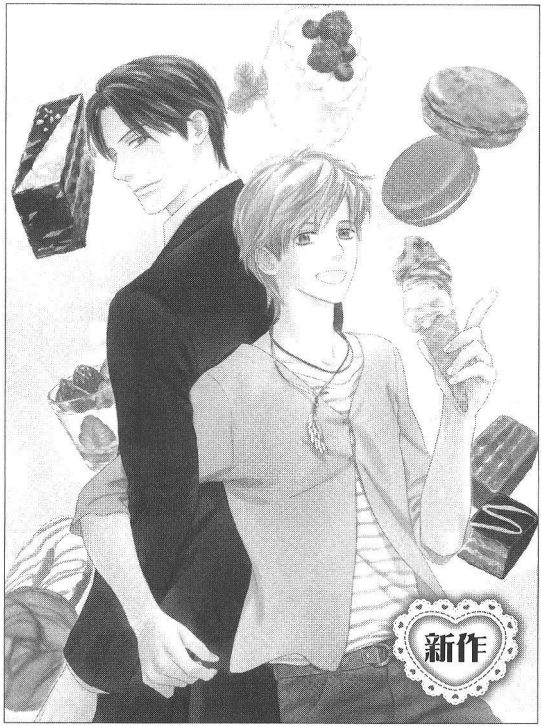
桜妃の仕掛けた精神攻撃により
甦るラスの過酷な過去
それとともに明らかになる
闇主との運命的な出会いは――!?



8月25日(木)発売!


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
狩人の覚悟
狩人の宝
コバルト文庫
好評発売中


コバルト文庫
好評発売中
本好き少女の
波瀾万丈ファンタジー！
前田珠子
イラスト／明咲トウル
天を支える者
天を支える者1～4
天を支える者 古懸隕1～5
天を支える者 罠は、蜜の味
天を支える者 緑風に誘われ
天を支える者 緑の糸をたどって
天を支える者 緑蘿の檻に囚われ
天を支える者 緑玉の枷に繋がれ
天を支える者 緑の鈴を、振る
天を支える者 空に響く緑の鈴音



甘い恋の賞味期限

あさぎりタ イラスト／穂波ゆきね

失恋した寂しさと酔った勢いから、サークル顧問の津山(つやま)准教授とホテルにお泊りしてしまった要(かなめ)。男同士であることをまったく気にせず、身体の相性が良かったことを理由に交際を持ちかける津山に怒った要は、ある条件をつけて付き合うことを提案するのだが…!?

好評発売中 コバルト文庫

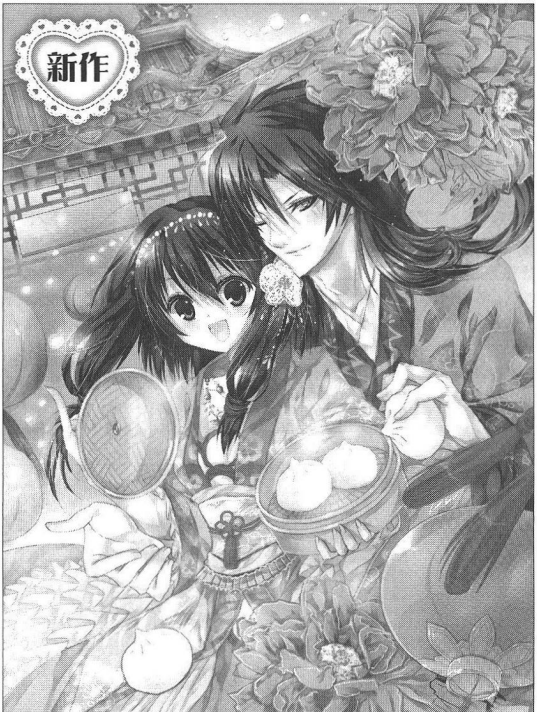


夢みる嘘つき人形

しらせはる イラスト／はやせあきら

理由あって17歳美少女の姿をした天才女博士フィオナ。学生時代の初恋の人ドミートリーをずっと忘れられないでいたが今や彼は敵国の大公。しかしある日ドミートリーから恋文めいた手紙が届き、彼の屋敷に呼び出されて!?　官能を科学する♥とろける錬金術ラブ♥

好評発売中 コバルト文庫



宮廷詩人に捧げるー皿

運命の包子（パオズ）

椎名鳴葉 イラスト／八幡 絢

亡き父の店を取り戻すため、料理人になろうと奮闘中の彩花（さいか）。ある日、修行中の酒楼に向かう途中で行き倒れの青年をみつけた彩花は、昼ごはん用の自作の包子を与えて彼を救った。しかし後日、有名な宮廷詩人が街の料理店で包子を食べ回っているという噂が流れて!?

好評発売中 コバルト文庫

コバルト文庫　雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作　正賞の楯と副賞100万円（税込）

佳作入選作　正賞の楯と副賞50万円（税込）

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚～105枚。
【しめきり】毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』1月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**（読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚～350枚。
【しめきり】毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』9月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt（2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売）をごらんください。

9784086015455

ISBN978-4-08-601545-5

C0193 ¥505E

定価 本体505円＋税

1920193005059



コバルト文庫

現「紅蓮姫」の使い手アーゼンターラと紫紺の妖主の闘いに決着がつこうとしていたその時…蜜里の黄玉に封じられていたラスの意識が遂に解放された！　死闘に耐える少女の姿を目にしたラスのなかで蘇る漆黒の記憶とは…!?　浮城にて真の目覚めを迎え、完全復活を遂げたラスは、息つく間もなく璃岩城に向かう。ラス、肉体をもって本格参戦！　大人気ファンタジーの新伝説がここに刻まれる！